

高齢者の学びと社会参加
～学びと社会貢献の循環をつくる～
(提言)

平成 29 年 10 月

仙台市社会教育委員の会議

目 次

提言 高齢者の学びと社会参加～学びと社会貢献の循環をつくる～

はじめに一検討経過	1
I 高齢者をめぐる現状と課題	2
II 政策・施策の動向—高齢者の学びと社会参加をめぐって	
1. 国の動向	3
2. 仙台市の動向	3
3. 高齢者の学びと社会参加推進の取組み	4
III 施策を進める視点と方向性	
1. 高齢者像の転換—アクティブ・エイジングという概念	5
2. 高齢期の学習をどう捉えるのか	5
3. めざすべき方向性	7
IV 高齢者の社会参加・学習活動の現状と課題	
1. 高齢者大学など組織的な学びの機会	8
2. 社会教育施設における学習機会	9
3. 市民センターにおける学習機会	10
4. 学校支援地域本部における学習機会	12
5. 大学などにおける高度で組織的な学びの機会	13
V 提言：豊かな高齢期を支える社会教育・生涯学習	
1. 多様な学びと参加機会の提供	15
事例紹介①	17
2. 移行期の学習・参加への機会提供	17
3. 高齢者の知恵と経験を生かした世代間交流の促進	19
事例紹介②③	21
4. 学びから活動・貢献へ：学びの循環をつくる	21
事例紹介④	23
おわりに	23

資料編

I 「高齢者の学びと社会参加」に関するヒアリング調査報告書	
○シルバーセンター部会	25
○学校支援地域本部部会	37
○社会教育施設部会	50
II 社会教育施設ボランティアに関するアンケート	
○集計結果・分析	62
III 参考資料	
○仙台市社会教育委員名簿	67
○仙台市社会教育委員の会議 審議の経過	68

提言：高齢者の学びと社会参加 ～学びと社会貢献の循環をつくる～

はじめに一検討経過

今期仙台市社会教育委員の会議は、国の生涯学習政策の動向、仙台市における教育振興基本計画等の審議状況及び仙台市の生涯学習の課題等に関する認識を踏まえ、「高齢者の学びと社会参加」をテーマに設定し、調査・研究及び議論を重ねてきた。

後述の「Ⅰ 高齢者をめぐる現状と課題」で確認しているように、我が国においては、地域的な格差を伴いつつ高齢化が深く進みつつあり、地域運営の困難や一人暮らしで課題を抱える高齢者が増大している。他方、ライフコースで見ると、退職等の後の時間が増大しており、人生の楽しみとしての趣味的な活動のみならず、高齢者が積極的に地域の諸活動に参加する機会が広がっている。こうした中で、仙台市の生涯学習事業を通して高齢者たちがより積極的に社会参加しうる機会を提供することが求められている。

このような認識の下、「高齢者の学びと社会参加」を推進する際の視点や課題を明らかにしたい。社会教育委員の会議の審議の経過は以下の通りである。

- 仙台市社会教育委員の委嘱を受けて以降、平成28年2月及び4月の2回にわたって今期の会議で検討すべき課題について議論を重ねてきた。様々な課題がある中で、防災教育や子どもの教育を取り上げる意見もあったが、防災教育や子どもの教育を不断に推進するためにも高齢者が安心して暮らせるコミュニティ形成や高齢者を含む世代間交流が必要であることから、今期テーマを「高齢者の学びと社会参加」と決定した。
- このテーマを受けて、平成28年6月の会議では社会教育の視点から高齢者問題への理解を深めるために学習会を行い、議論を進めてきた。さらに、仙台市の現状を確認すべく、部会を設置して高齢者の学習事業への参加状況及び企画者・参加者からのヒアリング調査を実施することとした。
- 平成28年8月の会議では、3つの部会、①シルバーセンター部会、②学校支援地域本部部会、③社会教育施設（博物館・図書館等）部会に分かれてそれぞれの施設を訪問するとともに、市民センターはすべての部会が分担して調査を進めることとした。調査は、9月～12月に実施し、このヒアリング調査をもとに報告書を作成した。これと並行して、社会教育施設ボランティアへのアンケート調査も実施した。
- これらの情報および関連する資料をもとに、社会教育委員の会議としての提言骨子を平成29年4月に確定し、分担して提言文書草稿を作成し、さらに議論を重ねてここに提言をまとめるものである。

以下、社会教育委員の会議としての提言を報告する。

I 高齢者をめぐる現状と課題

我が国の平均寿命は、昭和 22 年には男性が 50.06 歳、女性が 53.96 歳であったが、平成 28 年には男性が 80.98 歳、女性が 87.14 歳に達し、今後、男女ともに人生 100 年時代の長寿社会が到来しつつある。一方で、出生率の低下により、高齢化率は急速に高まりつつある。全国の高齢化率は、平成 47 年に 33.4%に達し、近い将来国民の 3 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計される。

仙台市における高齢化率は平成 27 年で 22.6%と全国と比較して低いが、平成 52 年には 3 人に 1 人が高齢者となることが見込まれている。また、中学校区別の高齢化率(平成 26 年 10 月 1 日現在)は、地域ごとに大きな差がある状況となっている。

高齢者のいる世帯についてみると、単独世帯、夫婦のみ世帯が全体の過半数を占め、子どもとの同居率は大幅に減少している。また、生涯未婚率の上昇や配偶者との離別・死別が増える中で、今後、高齢単独世帯が急速に増加することによる社会的問題の増加が懸念される。

長寿社会の到来によって、平均寿命が 60 歳前後であった時代の画一的な人生モデルが現実にはそぐわないものとなってきており、現代社会における高齢者は、これまでの社会の仕組みや常識とは異なる高齢期の生活(家族関係、健康生活、介護、在宅療養、最期の迎え方など)に直面し、これらに対処することが求められている。

これらのことから、高齢者が安全に安心して快適に暮らせる環境づくりのためには、高齢者自身が地域社会の担い手として活躍することが期待されている。また、高齢者が日常生活で直面する課題を的確に解決し、豊かで充実した質の高い人生を送るためには、現役時代から知識や技能を習得し、社会参加に必要な学習を行うことが必要となる。

社会参加の状況を確認するために、「仙台市民の生涯学習に関する調査(平成 24 年)」を見ると、高齢者が楽しさや生きがいを感じるのは「趣味やスポーツ」「友人・知人とのつきあい」「家族だんらん」「勉強や教養を身につける」「市民活動やボランティア」の順となっている。また、学習の目的は「生きがいや楽しみ」のためが最も多く、「社会や地域の活動に役立てるため」はあまり多くはない。

しかし、本会議が実施した「社会教育施設ボランティアに関するアンケート(平成 28 年)」によれば、本アンケートの回答者はかなりの頻度でボランティア活動等に参加しており、「余暇の有効活用」(54.9%)ということだけではなく、「社会貢献のため」(57.6%)や「活動に興味関心」(50.0%)があり、「生きがいを発見したい」(40.3%)と思っている。そして、こうした目的を彼らはほぼ達成していることも確認できた。

したがって、仙台市における高齢者の学習を社会活動に結びつけるためには、まずは地域課題や生活課題に向けた学習ニーズや学習活動の組織化が必要になり、さらには、生活課題が地域の課題に結びつくような新たな学習プログラムの開発が求められてくるのではないかと。

Ⅱ 政策・施策の動向—高齢者の学びと社会参加をめぐる

1. 国の動向

日本の高齢化のさらなる進展を背景に、平成7年「高齢社会対策基本法」に基づき「高齢者対策大綱」が策定され、対策としての諸施策が展開されている。超高齢社会に対応するため、「意欲と能力のある高齢者には社会の支え手となってもらおうと同時に、支えが必要となった時には、周囲の支えにより自立し、人間らしく生活できる」社会、「国民一人ひとりの意欲と能力が最大限に発揮できるような全世代で支え合える社会を構築する」ことを目指し、以下の方針を示している。すなわち、「高齢社会においては、価値観が多様化する中で、社会参加活動や学習活動を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められるとともに、社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされる。このため、高齢者を含めた全ての人が、生涯にわたって学習活動を行うことができるよう、学校や社会における多様な学習機会の提供を図るとともに、その成果の適切な評価の促進を図る」こととしている。

また、この大綱は、従来の高齢者像の転換及び市民の役割を改めて再考することも求めている。すなわち、「高齢者が年齢や性別にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍したり、学習成果を生かしたりできるよう、ボランティア活動を始めとする高齢者の社会参加活動を促進するとともに、高齢者が自由時間を有効に活用し、充実して過ごせる条件の整備を図る」こと、さらには、「ボランティア組織やNPO等における社会参加の機会は、自己実現への欲求及び地域社会への参加意欲を充足させるとともに、福祉に厚みを加えるなど地域社会に貢献し、世代間、世代内の人々の交流を深めて世代間交流や相互扶助の意識を醸成するものである。このため、高齢者を含めた市民やNPO等が主体となって公的サービスを提供する『新しい公共』を推進する」ことが課題として指摘されている。

この大綱では、参加の領域として6つの分野を設定している。それは、①「就業・年金等分野」、②「健康・介護・医療等分野」、③「社会参加・学習等分野」、④「生活環境等分野」、⑤「高齢社会に対応した市場の活性化と調査研究推進」、⑥「全世代が参画する超高齢社会に対応した基盤構築」である。このうち、③「社会参加・学習等分野」では、「(1)社会参加の促進」において、「ア.高齢者の社会参加の促進、イ.市民やNPO等の担い手の活動環境の整備」を指摘しており、「(2)学習活動の推進」では、「ア.学習機会の体系的な提供と基盤の整備、イ.学校における多様な学習機会の提供、ウ.社会における多様な学習機会の提供、エ.勤労者の学習活動の支援」をあげている。

2. 仙台市の動向

では、仙台市の行政施策としてどのような課題が指摘されているだろうか。ここでは社会福祉、教育の2つの側面から確認しておきたい。

(1) 社会福祉—高齢者福祉

社会福祉行政では、「仙台市高齢者保健福祉計画 第4章高齢者保健福祉施策の推進」の中

で「高齢者の社会参加・生きがいの促進」が課題として指摘されている。大切なことは、ここでも高齢者像の転換を求めていることであろう。この計画においては、「本格的な少子高齢社会においては、高齢者が『支えられる』だけではなく、社会を『支える』役割を担うことができるよう、社会参加活動の促進や就労機会の確保など様々な取組みを進めていくことが必要です。高齢者が健康で生きがいを感じながら、社会参加していくための取組みを支援することにより、地域で支え合う豊かな社会の実現を目指していきます」と指摘されており、具体的には、以下の2つの施策の展開が求められている。

① 社会参加活動の推進

ア. 社会参加活動促進のための環境整備、イ. 地域社会貢献活動の促進、ウ. 外出支援

② 多彩な生涯学習の展開

ア. 学習機会の提供、イ. 文化活動支援、ウ. スポーツ活動支援

このように、高齢者の学習活動及び社会参加が課題としてあげられており、教育行政への期待が大きいことが確認できよう。

(2) 教育—仙台市教育振興基本計画より

平成 29 年 1 月「第 2 期仙台市教育振興基本計画」が策定された。ここでは、主に、学校教育を念頭に議論が進められているが、本会議のテーマと関連するのは、「『学びのまち・仙台』を実現するための 3 つの目標」及び第 4 章「第 2 期計画における基本的方向」の基本的方向 2「生涯学習『学びにあふれ交流するまちをつくる』」である。

3 つの目標とは、①「学校・家庭・地域が絡ぐるみで子どもの教育を展開する」、②「様々な機会・場所で自発的に学びつづけることができる環境を整える」、③「楽しさや生きがいを実感しながら学びの成果を社会の中で発揮できる仕組みを形づくる」である。

基本的方向 2「生涯学習『学びにあふれ交流するまちをつくる』」は、やや具体性に乏しいところはあるが、4 つのミッションを確認する。①「人と社会をつなぐ多様な学びの機会の充実」、②「多様な社会教育施設による多彩な学びの充実」、③「学びの成果を生かし人と人がつながる仕組みづくり」、④「豊かな資源を活用した学びの提供・魅力の発信」である。

こうした課題は、子どもから高齢者に至るまで、生涯にわたって保障されるべきものである。

3. 高齢者の学びと社会参加推進の取組み

日本はいち早く高齢社会を迎え、社会保障、社会福祉的課題に対応することが求められている。それと同時に、高齢者の社会への参加・関与を通して自己実現を支え、より豊かな高齢期を過ごすことのできる社会的条件を整備することが大切な点である。

その際に、社会教育は大きな役割を果たすことが期待されている。しかし、超高齢社会の到来は、社会教育、生涯学習の事業や施策を行う私たちにとっても一つの挑戦であり、新たな課題が投げかけられていることも確かである。本会議は、これを積極的に受けとめ、現在の社会教育、生涯学習の事業を再点検して課題を確認するとともに、今後の方向性について提言したい。

Ⅲ 施策を進める視点と方向性

1. 高齢者像の転換—アクティブ・エイジングという概念

国及び仙台市の行政施策の考え方、施策の基本方向について確認してきた。ここでは、配慮や支援が必要な弱者としてのみ高齢者を見る立場から高齢者像の転換が図られていることが確認できる。

これは国際的な議論でも確認されてきた点である。高齢者とは、年齢的には65歳以上の人々を意味するが、これを単なる加齢の問題ではなく、いかに一人ひとりの高齢者にとって（自己実現）、また社会にとっても有意義に年齢を重ねるのか（社会貢献）という問題として理解すべきである。

これは世界保健機関（WHO）のディスカッション・ペーパーでは、アクティブ・エイジング（active aging）という概念で捉えられている。その意味は、①単に身体的に活動的ということではない、②社会的、経済的、精神的、文化的、政治的な事柄に継続的に参加・関与することを通して、家族、友人、地域、社会に貢献することであり、③自立、参加、尊厳、優しさ、自己実現を原則とすること、そして④世話される対象から権利の主体へ、という4点が強調されている。

ここでの高齢者は権利の主体であるとの確認に立ち、さらに、社会教育行政の課題を考えるとき、社会貢献とは狭義の公共的課題への参加を通じた貢献というだけではなく、家族、友人への貢献にまで広く捉えられていること、尊厳、優しさ、自己実現を図ることが原則として捉えられていることが注目すべき点である。

2. 高齢期の学習をどう捉えるのか

(1) 高齢社会の視点から

高齢化率は伸び続け、誰もが経験したことのない高齢社会が訪れる中、これまでとは大きく異なる高齢期のあり方が問われている。これからの高齢者はパイオニアとして自らの行く道について学び、自立して暮らせる地域づくりをしていくことが求められる。この高齢期をより充実したものにする、こと、”いきいき” ”わくわく” とした思いで過ごすことのできる生涯学習社会のあり方を考えていく必要がある。

他方、高齢社会の到来は、新しい問題を投げかけていることも確かであろう。例えば、介護保険制度維持の課題、老老介護問題等が表出しつつある。社会教育行政が高齢者の社会参加を

促進し、高齢者が生涯生きがいを持ち、心身共に健康で過ごせる期間をできるだけ長くすることが、若い世代の財政的負担をできるだけ軽減することにつながるだけでなく、高齢者を包摂する地域社会の形成にとっても求められる。

(2) 高齢者の視点から

人は誰でも自分の主体性を発揮し、能動的に生きること、それが社会的に承認されることを望むものである。学びにおける主体者であることを踏まえる必要がある。

しかし、その職業や子育てから離れた時、自分自身の存在価値を見失い、内にこもり、そこから心身の病などを引き起こす危険性も存在している。このとき、学ぶことにより自分の高まりを感じたり、社会と関わることで、精神的にも外に出られ、新たな視点で自分や人生を見つめる事が出来るだろう。生涯学習は、こうした機会を高齢者たちに提供する可能性を持っている。

学んだことを生かして社会的に貢献することが高齢者にも求められるが、NPO 活動への参加やボランティア活動への参加という形態ばかりでなく、地域での交流の中で高齢者の方たちの経験や知恵から学ぶこともできる。大切なことは、社会に参加・関与することのできる多様な機会をつくることである。

(3) 社会教育・生涯学習の視点から

仙台市の社会教育、生涯学習の事業では、これまでも学ぶ人たちのニーズや特性に対応して、きめ細かな配慮を行ってきた。しかし、高齢社会を迎え、これまで以上に学習者の視点に立って学習事業を提供することが求められている。

その際に何よりも大切なことは、加齢とともに精神的側面、健康・体力的側面、経済的側面を含めて社会参加のあり方が変化することを意識することである。例えば、より身近な地域に学びや社会参加の機会を整備することが必要となろう。また、身体状況も変化することから、アクティブな活動を伴うものから、読書やテレビ・ラジオの視聴を通じた学習まで、多様な参加と関与の機会について情報提供することが求められる。

確かに、高齢者の知識や知恵、経験を通して培われた力は社会にとっても大きな資源であるが、学習が充実した結果が社会貢献に結びつくような学習機会を提供すること、学習やその成果を通して家族、友人とのつながりや、彼らの尊厳や自己実現を自らがつくるのが大切である。

3. めざすべき方向性

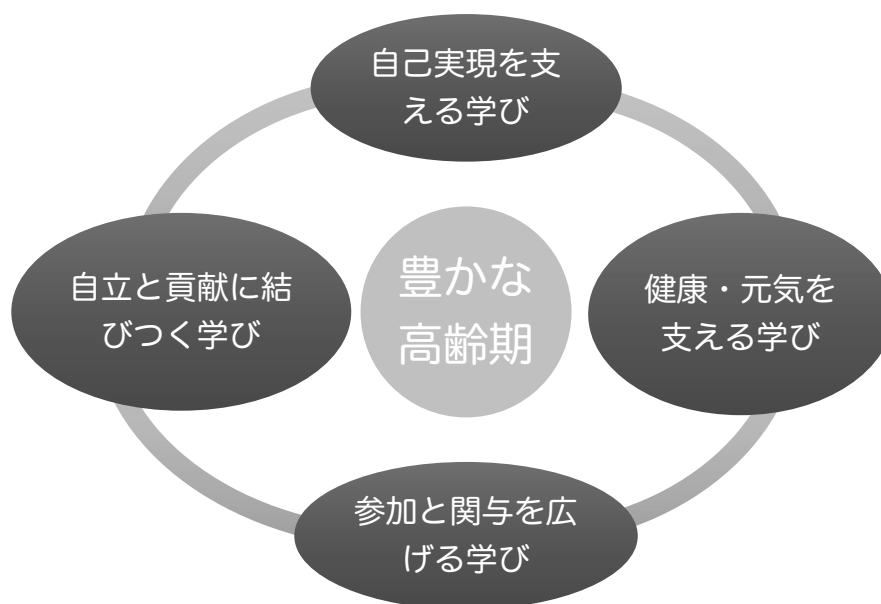


図1 高齢期と社会教育・生涯学習の役割

(1) 健康・元気を支える学びの機会の充実

ライフコースにおける高齢期を充実したものにする条件の一つとして健康・元気の維持・増進という課題がある。もちろん、個人差があるが、社会疫学の知見によれば、学習や文化活動、スポーツ活動への参加は、平均余命や精神的・身体的な健康と有意に相関する。

この領域では、社会福祉行政の領域でも多様で積極的な事業が行われているが、社会教育行政が行う事業はより広い裾野を持って進められている。これらの強みと成果を踏まえつつ社会福祉行政とも連携した事業の展開を進める必要がある。

(2) 参加と関与を広げる学びの機会の充実

参加や関与とは、ボランティア活動や社会的な課題解決のための取組みだけを意味するわけではない。地域の多様な人たちとの関わりや、社会における経済、文化、政治的な事柄に関心をもち暮らすことを意味する。したがって、生涯学習が提供する学習機会も、広い裾野を持つ趣味や教養的な学習から、社会的課題に関わる学習、大学等の提供する高度な機会まで多様性を大切にすることが必要である。

(3) 自立と貢献に結びつく学びの機会の充実

私たちは与えられた機会を楽しむだけでなく、主体的に選択し、自らが学び続けることを求める存在である。

学習機会を提供するにあたっては、その学びが充実したものとして感じられ、そこで学んだ

ことを地域社会の場で実践すること、そして、その課題解決のためにさらなる学びへと結びつくように企画・運営することが大切である。学びと活動の循環をつくるという視点を意識することが求められる。

(4) 自己実現を支える学びの機会の充実

学習の目的は、最終的には自らの自己実現を図ることにある。そのためには家族、友人、地域の人たちとの交流の中で社会的承認を得ることができることが大切である。学習の場は、楽しさ、やりがいや満足を感じる機会であるとともに、そこでの社会的承認を通して自らの尊厳と価値を確認することのできる機会である。社会貢献活動への高齢者の参加は社会的に意味を持つだけでなく、この点においても大きな意義がある。

IV 高齢者の社会参加・学習活動の現状と課題

高齢者の社会参加・学習活動の現状と課題を把握するため、現在仙台市の各所で行われている取組みを調査した。

1. 高齢者大学など組織的な学びの機会

(1) シルバーセンター（事業名：せんだい豊齢学園）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・カリキュラムは、アンケートを通じて受講生のニーズを反映させながらも、運営の手間を単純化し、受講生にとって安心感のある事業として実施されている。
- ・大学や専門学校との連携講座や学生と高齢者との世代間交流などが図られており、外部との連携も積極的に実施されている。
- ・せんだい豊齢学園の修了後も、生涯学習支援センターで実施する仙台明治青年大学に入学したり、シルバーセンターで設置している修了生による目的別のグループのネットワークであるせんだい豊齢ネットワークに参加したりするなど、学びを継続する受講者は多い。
- ・参加を通して、友人関係が構築され、学びや活動を楽しむ受講生が多く、今後も積極的な活動を希望するなど、意欲的な受講者が多い。
- ・居住地域の市民センターでの生涯学習を避けたり、あるいは都心への定期的な外出を楽しむとしてせんだい豊齢学園に参加する受講生も多く、都心で参加できる生涯学習の場としての意義がある。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・運営体制や受入施設の制限などが理由で、受講希望者に比べて参加者数を制限せざるを得ないという状況がある。団塊の世代が入学需要の多い70代に差し掛かることとともに、今後の高齢化の更なる進行を考えると、より多くの参加者を受け入れられるようにすることが必要である。
- ・せんだい豊齢学園を知らない高齢者も多いと考えられるため、潜在的なニーズも多いと思

料される。

- ・修了後に仙台明治青年大学やせんだい豊齢ネットワーク等に参加する修了生もいるが、向上心を持っている修了生に対し、学びから社会貢献へうまくつなぐことが難しい場合が多い。
- ・会社によっては 65 歳の定年退職制度が導入されていることや、親を介護しなければならないという老老介護の負担等により 60 代の参加が少ない状況である。また、男性の受講者が少ないことから、より多くの高齢者が参加しやすい環境を整える必要がある。

(2) 生涯学習支援センター（事業名：仙台明治青年大学）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・学習カリキュラムの検討にあたっては、小規模でのメンバー間の意見交換を実施するなど受講者のニーズ把握にも工夫を凝らしており、安定感のある運営をしている。
- ・学びを通じて生きがいを感じている受講者が多い。
- ・出席せずに在籍しているだけの受講者などもいるが、帰属意識を涵養するという意義もあり、この視点は重要なことである。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・せんだい豊齢学園同様、受入施設の条件等があり参加者数を制限せざるを得ない状況となっている。より多くの希望者が参加できる環境を整えていくことが必要である。
- ・受講生に対してカリキュラムに関するアンケートを実施しているが、回収率は 5%程度であるなどニーズ把握が難しい状況である。カリキュラムや講師選定に関しては、健康関連のテーマが定番となるなど多少硬直的な傾向も感じられる。
- ・運営に対して積極的に参加している受講者もいるが、運営への参画に積極的ではない受け身の受講者も多くおり、受講者間で意識の階層化が見られる。
- ・平成 28 年度の入学者の平均年齢は 71 歳であり、メンバーの高齢化が進んでいるため、60 代へのアプローチも必要になっている。

2. 社会教育施設における学習機会

(1) 図書館（活動団体：読み聞かせボランティア「ののはな」）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・読み聞かせ会や中学生の職場体験、老人ホームでの活動などを通じて、幼児から高齢者まで幅広い世代との交流が図られており、その交流が参加者のモチベーションにもつながっている部分もある。
- ・勉強することに好奇心を持ち、主体的な参加者が多く、活動を通じて自己実現や充実感を感じている参加者が多い。
- ・参加者同士で、それぞれの家庭事情を配慮し、速やかに活動を交代するなどの臨機応変な

対応がなされており、良好な人間関係が築かれている。やりがいのある活動を通し、お互いに助け合うつながりが生まれていることは大きな成果であると感じる。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・他のボランティア団体との交流がなく、活動に関する情報共有や課題解決などを図るのが難しい状況であり、今後より幅広い活動を促すために情報交換の場を設けることなどが課題である。
- ・参加者の高齢化及び固定化が進んでおり、新規参加者の開拓が必要である。ただし、専門的な知識が必要となるため、新たに参加するには少し敷居が高い部分がある。
- ・参加者の家族のボランティアに対する理解が低く、活動しにくいと感じている参加者もあり、ボランティアに対する理解をより促進していくことが求められている。

(2) 博物館（活動団体：博物館ボランティア「三の丸会」）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・参加者は、一般向けの講座に進んで参加したり、昼休みに自主的に勉強会をするなど、学びやボランティア活動に積極的で自助努力を行う人が多くいる。
- ・活動により日本全国、世界各国の人とのコミュニケーションをとれることに喜びを感じている参加者が多く、自己実現と充実感のある活動の場となっている。
- ・ボランティア同士は活動を通して親しくなるが、個人的なことについては本人が話さない限り触れないなど、適度な距離感で活動している。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・新規参加者の募集の仕方や任期、活動中の安全確保などボランティアの運営の仕方について難しい部分がある。
- ・参加者の取組みを地域の活動へつなげるような仕組みがあると、高齢者の活動の場が広がり、社会貢献の機会も創出される可能性がある。
- ・参加者が固定化している部分もあるため、参加者同士のコミュニケーションを図り、良好な人間関係を構築することで、より活動しやすい環境になると考えられる。
- ・学びを謳歌している参加者が多数いるので、自ら学ぶことの喜びを子どもに伝えられるような機会があると、子どもの学びへの意識を変えていける可能性もあるだろう。

3. 市民センターにおける学習機会

(1) 東中田市民センター（事業名：東中田老壮大学、かっこ語りの会）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・老壮大学は、学んだことを生活に取り入れることもさることながら、毎月1回地域の高齢者が集まってコミュニケーションを図る役割が大きい。
- ・かっこ語りの会は、歴史の古い地域という特性を生かし、併設する児童館、小学校、中

学校と協働し地域の成り立ちや先人の生活を知るという取組みであるため、活動をきっかけとした世代間交流が行われている。

- ・参加者が固定化されているが、それにより効率的な運営ができていているという部分もある。
- ・かにつき語りの会では、地域を知ることに関心をもちるとともに、地域への愛着を醸成している。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・老壮大学では、会場の大きさの問題により参加者数を制限せざるを得ない状況となっている。市民センターは他の団体の活動の場にもなっていることから、講座の回数を増やすなどの活動内容の多様化、活性化あるいは参加者の分割などの改善策の検討が難しい。
- ・参加者の中心は70～75歳であり、60代の参加が少ない。職業に就いている60代が増えたことや親を介護しなければいけないという老老介護等が大きな理由となっているものと考えられる。より参加しやすい機会の提供を検討していくことが求められる。

(2) 沖野市民センター（事業名：沖野耕友大学）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・会場設営の当番等、講座運営に積極的に関わってもらいやすくするために班を編成している。また、編成にあたっては新たなコミュニケーションを図るためにランダムな人選を行うなど、新しい人間関係を構築する工夫に努めている。
- ・近隣の沖野老人福祉センターや沖野地域包括支援センターでも高齢者向けの講座等を開催しており、施設間での特段の調整等をしていないため内容が重複することはあるが、高齢者に対したくさんの選択肢を提供することができるメリットがあるといえる。
- ・夏祭りや餅つき大会など市民センター、学校、町内会との連携事業により、高齢者と児童等の交流が図られており、核家族化が進んでいる中、世代間交流の貴重な機会となっている。
- ・参加者は、家の外に出ることや、高齢者同士や児童等とのコミュニケーションをとることを楽しいと感じていると窺える一方、地域コミュニティの基盤となる町内会を担う高齢者は、高齢者だけではなく壮年世代による地域活性化の必要性を感じている。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・市民センター主催の事業や連携事業に積極的に関わろうとする高齢者と全く参加しない高齢者に二極化している。
- ・持続的な講座運営のためには、沖野耕友大学から講師となる人材が輩出されることが望ましく、他事業や活動への講師派遣ができるような人材バンクとしての役割を担えるような体制づくりが求められる。
- ・会場の大きさの問題により、受講生を制限せざるを得ない状況である。今後の高齢者人口の増加も見据え、市民センター等のキャパシティの拡大や市民センター以外での集会・活

動の場の確保も必要となると考えられる。

- ・参加意欲がある高齢者が路線バスの本数減少により参加できなくなっている例もあり、高齢者が参加しやすい移動手段等の整備が求められる。

(3) 折立市民センター（事業名：折立老壮大学）

①高齢者（関連）事業の現状

- ・市民センターでの活動を通して、顔の見える人間関係が構築されることで地域の防災での協力体制も構築されているなどの効果もあるといえる。
- ・様々な人とのコミュニケーションを楽しみにしている高齢者が多く、参加することが生きがいになっている面もある。
- ・参加する以前のプライベートなことについては話さないという暗黙のルールがあり、参加者が適度な距離感を持った関係性を築くことで、活動しやすい環境となっている。このような人間関係のあり方は高齢者の学びにおいて注目すべき点だと感じる。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・共働き世帯も増えており、今後は女性も男性も定年退職後に地域の活動に参加することが増えていくと考えられ、地域での学びの機会等を知らない人も増えると想定される。より多様な人が参加できるよう様々な形で情報を発信していくことが大切である。
- ・一人ひとりの知恵を地域に生かしていくためにも、地域にある学校や社会学級等と連携する機会を作り、活動の場を広げていけるような仕組みも重要である。

4. 学校支援地域本部における学習機会

(1) 加茂中学校区学校支援地域本部

①高齢者（関連）事業の現状

- ・児童や生徒との新たな交流を通して、楽しさややりがい等を感じるボランティアの高齢者が多く、満足度も高い。
- ・学校担当のコーディネーターが、学校の要望とボランティアとして活動する人の性格や能力を踏まえて、うまくマッチングすることができており、学校の様々な活動の場でボランティアが知識や能力を生かして活躍することができている。ボランティアにとっては自己実現の場としての役割も果たしている。
- ・ボランティアで参加した高齢者同士や高齢者と児童や生徒とが名前呼び合える関係性が構築されることにより、災害発生時の共助の素地づくりの一助にもなっている。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・コーディネーターの力量が事業に大きく影響するため、地域の高齢者と学校とをつなぐコーディネーターの後継者を段階的に育成することが必要であると考えられる。

(2) 袋原小学校学校支援地域本部

①高齢者（関連）事業の現状

- ・児童や生徒との交流を通じて、活動が楽しみの枠を超えて生きがいや自信を感じることが出来る機会となっており、満足度が高い。
- ・児童や生徒と顔が分かる関係性を構築できるとともに、児童生徒に関する状況の変化などについて学校へ相談できる関係性も構築され、地域で子どもを育てる環境づくりにも貢献している。

②高齢者（関連）事業の課題

- ・事業を安定的に実施するには、スーパーバイザーの交代が円滑に行われるよう後継者の育成が必要である。

5. 大学などにおける高度で組織的な学びの機会

(1) 尚絅学院大学生涯学習センターの取組み

尚絅学院大学では、これまでの地域連携と生涯学習講座を発展させる形で、平成19年にエクステンションセンターを設置し、本格的に生涯学習講座の実施を始めた。平成21年には名取市増田に生涯学習センターを開設、平成25年には総合型地域スポーツクラブKIZUNAの事業を始め、尚絅学院大学の生涯学習プログラムは健康・スポーツ、メンタルヘルス、文学、語学、宗教、音楽、朗読、民族舞踊、ボランティア養成、現代的課題の学びなど多岐にわたる内容を実施するまでに拡充してきた。現在では、地域の中核的な知の拠点としての役割を果たしている。ここでは、数多くある講座の中から「転ばぬ先の杖さがし」講座を紹介する。

「転ばぬ先の杖さがし」講座内容（平成26年度）

		テーマ	講師所属	講師氏名
第1回	5月23日	総論 現状報告	特定非営利活動法人 経営体質改善サポート宮城代表理事	佐藤 洋一
第2回	6月20日	「『医』と『地域ケアサービス』を学んで生きていく」～認知症は 少子高齢時代の大きな社会的課題”早期予防の実践と生きがいある 長寿～	NPO法人仙台敬老奉仕会 理事長・仙台ターミナル7を考える会会長・東 北大学名誉教授	吉永 馨
第3回	7月18日	病気になった時に知っておきたい情報と集め方	宮城県がん総合支援センター 相談員 看護師・介護支援専門員	谷川 禎子
第4回	8月8日	“地域医療の要”在宅医療について学ぶ(医師の目線、市民の目線 から)	医療法人社団 爽秋会 岡部医院 院長	佐藤隆裕
第5回	9月12日	医療費・介護保険費用 そして病気の値段～	宮城県立がんセンター 医療ソーシャルワーカー	小野貴史
第6回	10月7日	在宅療養を支えるために①～訪問看護師の立場から～	医療法人社団 爽秋会 岡部医院訪問看護ステーション 所長	渡辺芳江
第7回	11月7日	在宅療養を支えるために②～ケアマネジャーの立場から～	医療法人社団 爽秋会 居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	山口 孝
第8回	12月19日	“地域包括ケアに向けて”地域包括支援センターの仕組みと役割～ 地域住民の顔が見える関係を創りあげていくためには～	名取南地域包括支援センター	小川琢也
第9回	1月16日	あなたに向き合う医療 ～石巻で在宅医療を考える～	元石巻赤十字病院緩和医療科部長	日下 潔
第10回	2月20日	まとめ 活力ある超高齢社会を共創する	尚絅学院大学 生活環境学科 教授	渡邊千恵子

「転ばぬ先の杖さがし」講座は、尚絅学院大学の生涯学習センターで平成24年度から平成28年度までの5年間、実施してきた講座である。生涯学習講座の受講生の多くは、中高年層が

多く、特に高齢社会における高齢期の生き方と逝き方には大きな関心を持っている。今後も高齢化率は伸び続け、誰もが経験したことのない高齢社会が訪れる中、これまでとは大きく異なる高齢期のあり方について学びたいというニーズに応え、講座を企画・実施した。毎年100名前後の受講生が、高齢社会の現状や介護、在宅療養を支える仕組み等について連続講座（5回～10回）を受講した。これらの学びから自主的な学習会が生まれ、講演会、見学会などを実施している。

(2) その他の取組み

その他の大学においても様々なテーマで市民向けの講座を開設しており、高齢者の学びの場にもなっている。例えば、宮城学院女子大学では、市民を対象とした生涯学習講座や、社会人の再学習などへのニーズが高まっている状況を踏まえ、生涯学習センターを拠点に、学生向けの講座に加え、大学の研究・教育の成果を地域に生かすための様々な講座を開講しており、その中で高齢者向けの講座も実施している。また、東北文化学園大学では、市民の学習活動への支援として多様なテーマの学習会の講師派遣を行っており、高齢者向けの健康や暮らしに関する学習の機会の提供に努めている。

仙台市においても、市の職員が直接市民のもとに出向き、仙台市が取り組む様々な事業等について説明をする市政出前講座を実施している。

V 提言：豊かな高齢期を支える社会教育・生涯学習





仙台市における高齢者を対象とする社会教育・生涯学習を推進するにあたって、以下の諸点に留意する必要がある。

第1に、個人的な条件の違いだけでなく、加齢により高齢者の精神的、身体的状況等も変化していくため、多様な学習者の状況やニーズに対応したきめ細かな配慮が求められる。

第2に、とりわけ、学ぶ機会へのアクセスが困難な高齢者に配慮した事業・施策を実施することが大切である。

第3に、高齢者の主体性への配慮が求められる。高齢者の知恵や経験を生かした事業、社会参加の機会を用意することが必要である。

これらのことを踏まえ、豊かな高齢期を支える社会教育・生涯学習について、以下で述べていく。

	1. 多様な学びと参加機会の提供 <ul style="list-style-type: none">・貢献から関与まで多様な社会参加の機会の提供・小地域から広域的な学習機会まで、多様な学習機会の整備・NPO、関係部局、大学等との連携による学習機会の提供	豊かな高齢期を支える社会教育・生涯学習
	2. 移行期の学習・参加への機会提供 <ul style="list-style-type: none">・加齢による変化に応じた学習機会の提供・現役世代から準備できる学習機会の提供・「終末」を迎えることに準備する学習機会の提供	
	3. 高齢者の知恵と経験を生かした世代間交流の促進 <ul style="list-style-type: none">・主体的に参加するための情報提供・活動支援・高齢者の知恵や、これまでの経験・体験を生かす機会の提供・子ども・若者を巻き込んだ世代間交流機会の提供・コーディネーターの育成	
	4. 学びから活動・貢献へ：学びの循環をつくる <ul style="list-style-type: none">・高齢者の自主活動への助成制度の見直し・学んだ成果の評価制度の創設・参加機会の提供のための社会基盤の整備	

1. 多様な学びと参加機会の提供

(1) 貢献から関与まで多様な社会参加の機会の提供

高齢者の豊かな知識、技術、社会的な経験はかけがえのない社会的資源である。高齢者が、これまでの長い人生の中で培ってきた豊かな知識や経験を生かせる場所、参加の機会を見出し、地域社会の担い手として活躍することは高齢者の生きがいとなり、また地域社会が抱える課題

解決や活力ある社会の形成にもつながっていくことになる。例えば、地域団体のひとつである町内会においても、多くの高齢者が活躍し、地域組織の運営を通して文化・スポーツ活動から防災に至る多様で重要な役割を果たし、地域社会形成の一翼を担っている。このように高齢者が主体的に学んだ成果を社会への参加や貢献につなげられるようバックアップ体制をとっていくことが大切である。

しかし、高齢者の参加は社会への貢献だけと狭くとらえるべきではない。家族や友人、地域の人たちとのつながりを保つことにより、私たちは高齢者の知恵や経験に触れることができ、そのことにより学ぶことが少なくない。そのためには、高齢者ができるだけ幅広く社会参加することや主体的・能動的に関与することができる機会を得ることができるよう配慮する必要がある。

(2) 小地域から広域的な学習機会まで、多様な学習機会の整備

高齢期には日常的な移動の範囲も変化する。仙台市の社会学級は、小学校単位で開設され、小学校長が社会学級主事となり学級を支援し、身近なテーマを通して学習機会を提供しており、小地域において高く評価できる活動を継続している。一方、市民センターは中学校区を基本にして整備されているが、集会所などより小さな範囲で学習の機会を用意することが求められる。特に、高齢化率が高い地区の市民センターでは、出前講座のように出向いて学習を支援する配慮などが必要となる。

また、多様な学習機会の一つとして、広く知識を外に求めるために行われている移動研修などは、日常の生活環境と異なる場所での研修であり、新たな学びの発見につながることも期待できる。こうした機会は精神的にも学習効果としても満足度が高いと評価されている。市域内での移動研修においては、仙台市老人クラブなどの活動を推進する仙台市の関係部局によって情報提供や協力が図られているが、これらとの連携が十分でないケースもあることから、移動研修先の選定を支援する態勢の周知を図る必要がある。

また、より広域的なものとして他自治体で行われている高齢者の学習との相互交流や社会教育施設などでの研修が考えられるが、そのための調整支援体制について検討することも必要である。

(3) NPO、関係部局、大学等との連携による学習機会の提供

高齢者の学習や社会参加の機会は、社会教育行政が提供する学習機会だけに限られない。多様な主体との連携・協働関係をつくることにより、豊かな学びと参加の機会を用意することができよう。例えば、仙台市の関係部局には高齢者の社会参加活動の促進や充実して過ごせる条件の整備、NPOには社会に貢献することを目指す高齢者を対象としたボランティア団体の設立、大学には学術性や専門性を生かして高度で組織的な学習機会としてアクティブ・エイジングの概念を地域に浸透させるような公開講座の開講などを企画・運営してもらうことなどが考えら

れる。

価値観が多様化する高齢社会においては、社会教育行政がこれらの機関や団体と積極的な連携を図り、多彩な生涯学習を展開していくことが求められる。そのためには社会教育行政が中心となり関係部局と連携して情報の共有や交換を行い、これらの活動の仕組みづくりや広報を行っていく必要がある。

【事例紹介①：社会学級】

仙台市教育委員会が市内の小学校と鶴谷特別支援学校の学区内成人を対象に、4月から翌年3月まで開設している学校開放講座の一つ。学区内に住む成人の方であれば、誰でも参加でき、年齢制限もない。

仙台市からの委託金と個人会費で運営され、現代的課題である環境・福祉・教育・社会問題・地域課題・教養などや、研究、共学、防災など学級生



学級の講座は月1ペースのところが多く、顔の見える関係づくりの場となっている。

が自主的に計画を立て、運営し、年間12時間以上の学習をしている。小学校を拠点としているため、小学生との交流や、世代間交流の機会となることも多く、学級生が共に学びあい、支えあい、高めあい、学んだことを活かし地域で発信、活動している方も多くいる。また、学級の講座以外にも、クラブ活動を行っているところもあり、中には30年以上も続けている方もいる。最高齢は94歳。

平成28年度は、116の学級で、約3,000人の方々がわいわい賑やかに学習活動を行った。

2. 移行期の学習・参加への機会提供

(1) 加齢による変化に応じた学習機会の提供

長寿化により、私たちのライフスタイルにも大きな変化が起こってきている。特に老後の生活においては、以前では考えられなかった60歳から80歳の約20年間を円熟期とする考えも生まれた。この円熟期には、本人の身体機能の衰えをはじめ、様々な変化や出来事が高齢者自身や家族に生じることになる。加齢（高齢）による身体的・精神的状況の変化、また、同じ年代であっても人により身体の状況も違うことにも配慮しながら、多様な学習機会を用意することが求められる。

例えば、定年退職は暮らしが大きく変わる転機であり、活動の場が職場から地域へと移行する時期である。その時期に学習・スポーツなど多様な参加の機会を用意するとともに、こつこつと続け、他者とつながることができるようにして、社会との関係を断ち切ることがないような工夫も必要となる。

健康の維持や介護生活への不安解消も高齢期の重要な学習ニーズである。高齢者が地域で安心して生き生きと暮らしていけるよう、保健医療の向上や福祉の増進を支援する中核拠点とし

て、市内 50 ヶ所に地域包括支援センターが設置されており、高齢者や家族の方からの様々な相談、介護予防サービスの紹介や関係機関との調整、虐待防止などの権利擁護活動が行われている。

地域包括支援センターは高齢者に関する様々な知見と経験を持ち、高齢者一人ひとりの生きがいや自己実現、生活の質の向上を目指す介護予防教室などを各地区集会場等において開催していることから、学習の提供者として協力を得たり、あるいは学びの場として有効に活用することが可能である。生涯学習の機会の一つと認識するとともに、仙台市の関係部局間の連携によって効率的・効果的に活用されるよう、それぞれの事業体系に組み込まれることが必要であろう。

(2) 現役世代から準備できる学習機会の提供

現役のビジネス・パーソンは、時間的な制約から生涯学習や地域活動に参加しにくいいため、概して地域との関係性が希薄であることが多い。退職後に自由な時間を取れるようになると、それまで仕事を通じて築いてきた社会との関係性を、今度は個人として再構築する必要が生じるが、地域での居場所づくりをうまくできない人が少なくない。

現役世代は仕事を通じて培ってきた最新の知識や技術を持っているため、彼らの参加によって、生涯学習や地域活動がより活性化し、充実することが期待できる。現役世代ができる範囲で社会教育に参加し、早い段階から地域デビューを果たすことで、本人と地域双方にとってメリットが生じるであろう。

そこで、例えば、地域の多様な学習組織を知って、体験してもらいイベントを行ったり、団体の情報発信システムを構築するなどして、興味のあることからスタートする機会を創出する仕組みづくりが求められる。

(3) 「終末」を迎えることに準備する学習機会の提供

どのように最期を迎えるかということについては、1980年代から人々の関心事となり、全国に生と死を考える会が誕生し、尊厳死という言葉が浸透してきた。日本尊厳死協会では、自分の命が不治かつ末期であれば、延命措置を施さないでほしいという尊厳死の宣言(リビング・ウィル)を発行・保管することによって、自然死や平穏死を望む方々をサポートしている。

内閣府「高齢者の健康に関する意識調査(平成 24 年)」によると、高齢者の多くが自宅で、延命のみを目的とした医療は行わず、自然にまかせた死を望むと回答した一方で、病院で最期を迎える人が圧倒的に多い。すなわち、自分が望む最期を送ることができない人が多いということを示している。

こうした状況を踏まえると、死や死に至る病について語ること、学ぶことについては依然としてタブーとする意識があるが、高齢者や若い世代が高齢者を支えることによって、自分自身の最期のあり方を導き出していくという学びと実践のプログラムを作り出すことができれば、

長寿社会の新たな学びのモデルになるであろう。やがて訪れる死を見つめることは、限りある生を充実したものにするに結びつく学習課題である。

3. 高齢者の知恵と経験を生かした世代間交流の促進

(1) 主体的に参加するための情報提供・活動支援

高齢者が学習に参加し、やがて学びを生かした社会貢献活動に参加するようになるには、いくつかのプロセスを経ることとなる。まず大切なことは、情報を手にすることが出来ない高齢者を一人でも少なくするための広報の努力が必要である。既存の市政だよりはもちろんのこと、お知らせのチラシを回覧板や掲示板を使ったり、可能であれば近隣の店舗や郵便局、銀行に置いてもらうなど身近な所での周知の他、大きな取組みとしては、各主催団体から情報を集めて、それらの情報を一覧できるインターネットサイトの開設などを目指すことも考えられる。

また、意欲や関心のある方が、参加した講座の内容を生かした社会参加ができるよう社会教育施設や学校、その他の場所でのボランティア活動の情報などを、講座受講時にその場で手にできるようにすることも必要である。学んだことを生かす活動を通して、それがまたより高度な学びへと結びつくこともあるため、講座に参加した方々のその先の可能性を見据えた情報提供や支援が求められる。

老壮大学や仙台明治青年大学のように単に講座に参加するのみならず、学習者である高齢者自身が企画と運営を担っていく機会を作っていくことや、高齢者自身が自ら活動する場を新たに作る際に、その活動を支援する体制も必要である。

(2) 高齢者の知恵や、これまでの経験・体験を生かす機会の提供

高齢者が支えられるだけではなく、社会を支える役割を担うためには、高齢者の知恵や経験・体験を生かすことができる社会参加の場が必要である。社会参加によって学びが継続され、そのことが次の社会参加へとつながるからである。さらには、普段から顔の見える関係づくりや、地域コミュニティの形成促進につながることも期待できる。

仙台市の高齢者の社会参加の現状は「特に参加していない」が半数近くを占めているため、まずは参加のきっかけを用意する必要がある。例えば、高齢者の経験や体験に合わせて、子育て、就業、健康、学習、環境、福祉などの多様な分野で、それぞれ初心者から経験者まで段階を踏んで参加しやすいように講座を設けることが考えられる。

また、講座終了後に受講者同士が交流できる自主グループの設立を支援することも効果的であろう。

(3) 子ども・若者を巻き込んだ世代間交流機会の提供

核家族と単独世帯が増加する現代社会において、子どもや若者と高齢者との交流機会は激減している。本来であれば家族内や地域で行われていた各世代間での交流が減少しており、高齢

者の体験、知恵などに触れる場づくりの必要性が高まっている。

世代間交流は、地域の人々の人間関係の活性化、自らの能力のスキルアップや人間的成長などを、また、核家族化が進む現代においては特に家庭の中で培われづらい幾つものメリットを与えてくれると考えられ、若い世代にとっては生きる力を学ぶという教育的効果、高齢者にとっては若い世代への適応に向けての支えをつくることにつながる。

人と人との関係を中心とした新しい生き方を大切にするには、高齢期における信頼感や自発性の葛藤の解決を促し、個人の適応を導くことにもなる。

今回の議論の中では、高齢者と子どもや若者の交流の機会として学校支援地域本部や社会教育施設などを調査したが、高齢者が一方的に教えるだけではなく、子どもや若者と時間と場を共有し、会話が生まれるような交流が、楽しさややりがい、生きがい・満足度を高くしていた。また、市民センター主催のお祭りやイベントを通して、高齢者と子育て世代の地域住民や児童・生徒との交流が図られている好事例も多く見られた。

このような各世代間の交流によって、結果的に顔の見える地域づくりができ、お互いに名前呼び合える関係性が構築されることが分かった。このような関係性が広がることによって、他者への理解や思いやりの心、社会性などが自然と高まり、配慮や支援が必要な社会的弱者とされる子ども・高齢者・障害者の見守り、独居老人への声掛け、防犯・防災、子育て支援、青少年健全育成、広義の高齢者支援等の様々な場において、互いに支えあう心豊かなコミュニティが形成され、安全・安心な社会の実現に向かっていくものと考えている。

また、本市で重大な問題となっている学校でのいじめなどの未然防止、学校・家庭・地域での兆候の察知や早期対応などにもつながることが期待できるのではないかと考えている。

総じて、社会教育の分野と社会教育以外の分野の官民の取組みや施策との相乗効果を念頭に置いた連携・協力も求められよう。

(4) コーディネーターの育成

地域の活性化と地域住民のボランティアによる学校支援を目的として、仙台市内の全中学校区に学校支援地域本部が整備されている。この事業は、学校担当のコーディネーター（地域住民）が学校からの要望を受け、地域住民の得意分野等を踏まえてボランティアを依頼し、授業等を支援するシステムである。学校支援の活動は、ボランティアの能力を生かした活動内容となっているため参加した高齢者がやりがいを感じ、意欲的に活躍できる場であるとともに、児童や生徒と高齢者との交流が生まれる場でもあるため高齢者の貴重な社会参加の機会となっている。

この事業を推進していくためには、コミュニケーション能力にたけるコーディネーターの存在によるところが大きいことから、コーディネーターの世代交代を見据えた準備・養成が課題となる。

【事例紹介②：NPO 法人シニアサロン井戸端会議】

シニアによるシニアのための組織として、「好きなことを好きな時間に好きな仲間と活動する」ことをモットーとして、平成 22 年に設立された。現在は、会員数約 150 名で、震災復興支援（牡蠣の仕入れや販売）、井戸端塾・井戸端大学（セミナー、講座等）、イベント・同好会（麻雀、ウォーキング、ダンス、男の料理、若者とシニアの討論



第 104 回目の井戸端塾の様子(平成 29 年 7 月)

会) など 30 弱ものグループを構成し、毎日のように拠点（イベントルーム）に集っている。また、独自に経営する居酒屋やカフェを運営したり、平成 28 年度は仙台市の住民主体による訪問・通所型生活支援モデル事業として高齢者等から軽作業を有償で請け負う「井戸端お助け隊」を運営したりしている。既成の団体では物足りない、自分にはちょっと合わないと感じている人々が、多角的かつ自由度の高いアメーバ的な活動を自主的に行っている。また、インターネットを活用した活動の広報にも力を注いでいる。

【事例紹介③：高森東ふるさとづくりの会】

東日本大震災を契機とした地域の絆と活性を求める機運の高まりを受け、高森東地域の住民有志で「高森東ふるさとづくりの会」を結成。高森市民センターの事業として平成 24 年度から高森東公園を核とした地域交流会やイベント等を通した「新しいふるさとづくり事業」に取り組んだ。3 年間の市民センター事業が終わってからも住民の集いの場である高森東公園の整備を活動の中心と



整備された公園に手作りのステージとベンチを並べて開催した高森絆コンサート

し、高森絆コンサートや収穫祭、灯籠流しなどを実施し、次世代に継承できる地域固有のイベントとして定着してきた。活動にあたっては、運営基盤を強化するために個人賛助会員、企業などの法人等の賛助会員を募っており、会員が増えてきている。

この事業を通して、ボランティア団体、学校、幼稚園、町内会、企業等がつながり、地域の方の様々な力を得て、ともに取り組んだことで、地域への愛着心や地域の絆が深まるとともに、薄れつつある地縁を再構築して地域コミュニティの活性化を推進し、地域で活動する人材の養成にも寄与している。

4. 学びから活動・貢献へ：学びの循環をつくる

(1) 高齢者の自主活動への助成制度の見直し

高齢者が多い地域とは、人材が豊富な地域、つまり大きな社会資源を持っているといえよう。

超高齢社会に直面している今日、様々な高齢化問題を解決するためにも、教育と福祉を有機的に結び付けたより積極的な高齢者教育の理念の確立と施策が求められる。高齢者の力も得ながら教育と福祉の連携を図り、学習の成果を生かすさらなる可能性を追求することができる主体的な活動を助長し、行政の枠を超えたより大局的な取組みにつなげられるよう、従来の高齢者の活動を支援する助成制度を改めて見直すことが求められる。

(2) 学んだ成果の評価制度の創設

学習への参加は、市民一人ひとりのニーズの充足のために自主的・主体的に行われ、個人の自己実現を図ることを基本とする。同時に、この学習への参加を通して、市民同士の交流が生まれ、学習の成果を社会に還元することに結びつくなど公共性・循環性を持った社会参加という性格も持つ。学習をより充実したものにし学習の輪を広げるためには、こうした学びの履歴や成果を社会において適切に評価することが大切である。個人の学びの履歴や成果が評価されることにより、高齢者自身の学習意欲の向上につながるとともに、社会参加のロールモデルとして広く共有されることで、より多様な人が社会に参加するきっかけとなることが期待される。

方法としては、例えば、仙台市独自の学習履歴の評価制度をつくることが考えられる。とりわけ、社会教育施設におけるボランティア活動などについては、公益的活動という性格もあるため積極的に評価する視点も大切である。ただし、それはあくまで動機づけであって、こうした評価制度による証明や資格取得が自己目的化したり、過度になりすぎることがないように配慮する必要がある。

(3) 参加機会の提供のための社会基盤の整備

平成 27 年 12 月の地下鉄東西線開業に伴い、バス路線の再編が行われた。この結果、地域によっては運行回数の減少や経路の変更によって、学びの場となることの多い市民センターやコミュニティ・センター等へのアクセスが容易でなくなったという声も聞かれる。

高齢者が積極的に学びの場所に出向くことができるようになるためには、利便性の向上も求められ、特に中山間地域や郊外団地等における乗合タクシーやコミュニティバスの運行といった市民協働による新たな地域交通の導入に対する支援なども解決策の一つである。また、歩いて行くことができる身近な学びの場所の確保やその均衡的な配置のためには、学校施設の開放や商店街の空き店舗の利活用を可能とする仕組みのほか、これらの運用を支える調整・支援組織の仕組みを確立することも大切である。このため、関係部局との連携・協力を図りながら、高齢者がより活動しやすい社会基盤の整備を推進することが求められる。

【事例紹介④：NPO 法人仙台敬老奉仕会】

平成 18 年に設立。現在、介護施設 15 箇所へ約 50 人（30 代～80 代）の寄り添いボランティアを派遣している。特筆すべきは、ボランティアに、しっかりとしたスキルを身につける研修を行うと共に、施設側にも、受け入れ体制の整備を促していること。「せっかくボランティアに出向いても、洗濯物の整理や庭掃除だけでは長続きしません。

我々は、施設の要望を聞きながら、訓練された

ボランティアを派遣すると同時に、施設側への働きかけもしています。これまでのボランティアへの依頼は、慰問や軽作業が中心。利用者に直接寄り添う活動は危険で任せられないという従来の考え方を変えていかなければ、人手不足で困難な時代を迎えると言われる日本の介護事情に対応できません。ボランティアの役割は非常に重要です。」とは、会の責任者談。

「しっかりと寄り添い、利用者の方に喜んで頂くことが何よりの幸せ」と言うボランティアからは、「反応がなく徘徊を続けていた利用者の方から声を掛けられた」などの、大きな喜びの声が寄せられる。高齢者だからこそその社会経験が活かされる場とも言えそうだ。

欧米に比べると、ボランティア文化がまだまだ根付いていない日本。ボランティアに対する意識が変わることで、高齢者の活躍の場が増え、世代間交流が広がるなど、社会全体がうらやまになっていくイメージが浮かぶ。そんな社会の実現を目指す、仙台敬老奉仕会の活動の広がりを期待したい。



毎週 1 回開かれる会議では、研修や運営に関して熱心な話し合いが行われる。

おわりに

現在、私たちは社会の大きな転換点に立っている。この提言のテーマとの関係でいえば、人生 100 年時代を迎えつつある。

国や自治体の政策の面では、高齢化に伴う財政危機をめぐる問題や、介護問題、高齢者世帯の生活基盤の脆弱性や孤立に伴う精神的問題などが課題として議論される傾向にあるが、人生 100 年時代において一人ひとりがどのように充実した暮らしを実現することができるのか、ということが問われるべきである。この面で、社会教育・生涯学習に期待される役割は大きい。

今期、仙台市社会教育委員の会議では、社会教育・生涯学習の事業を通して高齢者の社会参加、社会貢献をいかに図るのか、ということを中心に、社会参加を通して生きがいを感じることに、特に高齢者が人生の中で積み上げてきた知恵や経験を生かしながら、人々からの承認を通して自己実現を図ることが何よりも大切であるという認識に立って議論してきた。

この点で、仙台市の社会教育行政施策は重要な成果をあげてきていることが会議の調査からも確認できる。しかし、同時に、たくさんの課題も見えてきたことも確かである。こうした課

題をめぐり、会議として重ねた議論をもとに提言をまとめている。

冒頭に述べたように、人生 100 年時代、超高齢社会はまだ誰も経験したことの無い未知の時代でもある。同時に、生産や暮らし、これらをめぐる私たちの価値観そのものを改めて問い直す挑戦を含んでいる。こうした点については、社会全体にわたることから十分に吟味できなかったが、仙台市教育委員会ほか関係部局は、この提言をもとに、仙台市の社会教育事業のあり方を改めて検討し、必要に応じて大胆に見直す一助とされるよう期待したい。

資料編

I 「高齢者の学びと社会参加」に関するヒアリング調査報告書

○シルバーセンター部会

1. 部会員

男澤亨委員（部会長）、阿部清人委員、佐藤美佳子委員、渡邊千恵子副委員長

2. 訪問先施設

- ・第1回調査：シルバーセンター（事業名：せんだい豊齢学園）
- ・第2回調査：生涯学習支援センター（事業名：仙台明治青年大学）
- ・第3回調査：東中田市民センター

※それぞれの調査結果は28ページ以降

3. ヒアリング調査結果（総評）

(1) 高齢者の学習と社会参加の現状

調査対象のせんだい豊齢学園と仙台明治青年大学は全市からの参加、東中田老壮大学は市民センター管轄地域からの参加と、参加者の属性が異なるので、前者を全域型講座、後者を地域型講座とする。

いずれにおいても、講義のカリキュラムに自主的な企画やアンケートを通じて受講生のニーズを反映させながらも、運営の手間を単純化し、受講生にとっても安心感のある事業として実施されている。

年齢層は60代後半から70代が多く、女性が7～8割を占める。現在、仕事をしている人も少なくなさそうだ。

全域型講座においては、大学や専門学校との連携による講座や学生と高齢者との世代間交流を行っている。また、受講生や修了生による目的別グループが編成され、それぞれ自主的な活動を行っていたり、組織の運営に携わっている場合もある。総じて、活動的な高齢者が多く、地域型講座には参加したくない、あるいは飽き足らないという理由で参加しているようだ。

地域型講座においては、規模や人材の制約から全域型講座に比べると事業の勢いには乏しいが、学びよりも交流、コミュニケーション、歴史や資源を知るといった地域に密着し、全域型ではできない役割を担っている。高齢者にとって重要な移動手段の制限のため、住居の近くで参加したいというニーズも大きい。

「友達ができるのは最高」「キョウイク（今日行くところがあることと教育のもじり）が生きがい」「病気、認知症などに関心が高くなった」など、学びの楽しみを謳歌しているようである。全域型、地域型ともに高齢者の生活、あるいは人生のよりどころとしての役割は大変重要である。

(2) 高齢者の学習と社会参加の課題

全域型講座においては、受講希望者に比べて、参加者数を制限せざるを得ないという課題があった。これは運営体制や受入施設の制限などが理由であるが、現実に半数にも及ぶ希望者が希望枠に入れない。また、今後団塊の世代が入学需要の多い70代に差し掛かるとともに、高齢化の更なる進行を考えると、喫緊の課題と言わざるを得ない。

受講生以外の高齢者にヒアリングしたところ、全域型講座の存在を知っている人が少なかった。顕在的なニーズ（受講非当選者）も潜在的なニーズも多いと思料される。

地域型講座においても、受入施設のキャパシティによる参加者数の制限が課題であった。調査対象の東中田市民センターにおいては、一番大きな部屋で椅子だけにしても受講生全員が入らない。現実には欠席者が2割程度いるのでなんとか間に合っている状況である。

地域型講座は、市民センターの施設予約の優先順位で優遇されているが、他の利用グループ等で施設予約の取り合いが激化しており、施設利用回数や時間を増やすことができない。従って、講座の回数を増やすなどの活動内容の多様化、活性化あるいは参加者の分割など改善策を検討できない状況にある。

ボランティアとして運営を担っている受講生からは、一般の受講生の運営への理解不足を嘆く声が聞かれた。参加者の中でも、積極的に運営に参加する層から運営への参画には積極的ではない参加層まで意識の階層化が見られる。

また、全域型講座、地域型講座で共通して、60代の参加が意外に少ないことが感じられた。これは会社によっては65歳の定年退職制度が導入され、職業に就いている60代が増えたことも理由であるが、親を看なければならぬという老老介護の理由が大きいという。また、男性の受講生が少ないことも問題である。

(3) 高齢者の学習と社会参加促進のために考えられる施策・取組み等

①外部施設との連携

受入施設の拡充による受講生の受入可能数の拡充は喫緊の課題であり、市民センター等市管理施設の活用では限界がある。市内にある国や県の施設、民間の施設あるいは商店街の空き店舗等をサテライト施設として活用する方策を検討されたい。

②外部組織との連携

全域型講座においては既に大学や専門学校の連携を行っているが、定員を増やすこと以外にも別の受講形態を検討して、受講生を拡大することも有意義ではないか。例えば、現在のカリキュラムが総合大学だとすると、実用性の高いカリキュラムによる単科大学やもっと受講時間を絞ったカルチャースクール的なものである。民間の同種機関との協業の可能性もあろうかと思われる。

また、小学校等へ受講生が外向いて、昔遊びを教えるとの事例も聞いたが、そのような前向きな高齢者による学校や地域への出前講座などによって、めっきり少なくなっ

しまった世代間交流の機会の創出も考えられそうだ。

③広報

前述のように、講座の存在を知らないという人も多く、広報の方法に課題が残る。民間が行っている方法をまねて、インターネットの活用を積極的に考えてほしい。

調査日：平成 28 年 9 月 30 日（金）

施設名：シルバーセンター（事業名：せんだい豊齢学園）

参加者：阿部清人委員、男澤亨委員、佐藤美佳子委員、渡邊千恵子副委員長

対応者：（公財）仙台市健康福祉事業団シルバーセンター 伊藤いきがい推進課長、
斎藤係長、今野主任

せんだい豊齢学園第 2 学年総合生活コース学園生 3 名

1. 高齢者（関連）事業の現状

(1) 事業について

- ・総合生活コース（定員 60 名）とふるさと文化コース（定員 60 名）の 2 つのコースがあり、毎週月曜の 10：15～14：45 に開講する。在学は 2 年間。再入学は不可であり、学習時間は年間 99 時間程度（33 日間）、受講料は年間 22,000 円。対象者は 50 歳以上の市内居住者。
- ・ふるさと文化コースが人気で、2 倍以上の申し込みがあり抽選で決定。
- ・カリキュラムは年 1 回、事業運営委員会を開き決める。学園生のニーズはアンケートで集約する。
- ・運営は事業団の事業費（職員 5 人の人件費など）と受講料で行っている。

【学園生の属性など】

- ・男女比は 2 年生の 7 割が女性、1 年生は半々。
- ・平均年齢は 68 歳。
- ・現役時の職業は 6 割が一般企業。そのほか、教員、公務員が多い。農業、自営の人もあり。専業主婦は少ない。
- ・居住地域は、市内まんべんなく、偏りが無い

(2) 企画運営について

【募集方法と応募状況及び定員】

- ・入学案内は 1 月から市の関係機関、シルバーセンターでの行事参加者、シルバー人材センター（会員 2,500 名）、教職員退職者、市退職者へ配布。ボランティア団体へは DM を送付。
- ・応募者は震災で一度減ったが、その後増え続けている。申込みしたが抽選で落ちた人がおり、そのような人が翌年以降に再度申込みを行うこと等があるためである。
- ・館外学習、グループ学習をすることを考えると 60 名が限界で、定員は増やせない。

【コースの設定経緯】

- ・以前は介護研修センターが合併して福祉コースがあったが、希望者減で閉鎖し、人気があった現在の 2 つのコースに絞られた。

【外部連携】

- ・連携講座として東北文化学園大学との公開講座を 4 回実施している。

- ・隣の東北保健医療専門学校の学生が学園生にインタビューをしたり、一緒に受講することがある。(専門学校側が教育の一環で学生と高齢者との世代間交流を希望)

【学習後の活動】

- ・修了生によるせんだい豊齢ネットワークがある。約40の目的別グループが活動しており、市民センターの部屋の予約が大変なため、シルバーセンター内の施設を使えるように支援している。
- ・ネットワークに参加することで友達ができていることは評価できる。

【社会教育行政との接点】

- ・修了生の多くが仙台明治青年大学へ入学する。
- ・せんだい豊齢ネットワークのメンバーが市民センターの講師を務めることもある。
- ・歴史民俗資料館で昔遊びの講師を務めることもある。

(3) 受講者・参加者について

【入学のきっかけ】

- ・市政だよりで知り、時間を有効に使うために入学。近隣の市民センターは隣町のため少し抵抗があった。体操教室で既にシルバーセンターへ通っていた。(男性)
- ・区役所で入学案内を知った。もともと豊齢学園の存在は知っていた。家にいても居場所がないから外へ出て仕事をしていた方が楽しい。月10日ほど仕事をしながら通学している。(男性)
- ・60歳で職場を退職し、63歳まで臨時雇用で働き、退職を機に、自己管理のため豊齢学園に入学した。家族は夫と娘。(女性)
- ・夫が働いているため、自分の時間の使い方に余裕がある。加えて、夫の理解があり続けられている。(女性)
- ・働いているときにはしたい事はたくさんあったが、何も出来なかった。身体が丈夫なことに感謝している。(女性)

【居住地での学習状況】

- ・地元にはコミュニティ・センターしかなく生涯学習の機会が少ないと感じていた。(男性)
- ・市民センターは敷居が高い。(男性)
- ・地下鉄のおかげで富沢から泉中央の健康増進センターへ行けている。(男性)

【別の団体での活動状況】

- ・現在、6つの団体に所属(カラオケ・舞踊・健康マージャン・体操・豊齢学園・地域の老人クラブシニア大学)。(女性)
- ・身体を動かすことが好き。人と話すことが好き。(女性)
- ・市政だよりで講座を探し、月曜～金曜まで常に何かに参加している。(女性)
- ・地域の老人クラブでの世代間交流は勉強になる。(女性)

【入学をしてみたの感想】

- ・この1年半受講して考え方が変わった。生活のはりあいになっている。(男性)
- ・年に3回程度、8人の班ごとに、飲食を伴う懇親会がある。友達ができるのは最高。(男性)
- ・病気、認知症などこれから自分に関係することに関心が高くなった。(男性)
- ・女性の方が情報を早くキャッチして活動していると感じる(男性)
- ・参加していない人は、いまさらという気持ちを持っていると思う。参加しない人は何があっても出てこない。(男性)
- ・夏休み、冬休みを短くして、もっと講義を増やしてほしいと思う。(男性)
- ・社会貢献のきっかけ作りになった。今まで以上に積極的になれた。知識が増えた。豊齢学園を卒業したら他の事にチャレンジしたい。手話を通じて障害者の方々とふれあいたい。(女性)

【地元での若者との交流状況】

- ・子供会で公園の掃除をしてくれている。(男性)
- ・夏祭りくらいでそれ以外はない。(男性)
- ・小学校ボランティアで昔遊びを教えたことがある。町内会に依頼がきた。(男性)
- ・小学校ボランティアの募集は知らなかった(男性)

【今後の活動】

- ・学ぶことの楽しさを知ったので、身体が続く限り学習を続けたい。(男性)
- ・修了した後は仙台明治青年大学へ行きたいと考えている。(男性)
- ・何もしていない時間をもったいない。身体は常に動かしていきたい。今出来る事を前向きにやっていきたい。(女性)

2. 高齢者（関連）事業の課題

(1) 企画運営について

- ・IT 講座については、学園生の中にスキルの格差があるため、レベルをどこにあわせるか悩む。
- ・現在的人数でも館外学習、食事の場所の確保が大変。

(2) 受講者・参加者について

- ・年齢が50～80歳で、文化的背景も違い、価値観に差がある。
- ・2年間で1割程度は退学するが、老老介護が理由の場合が多い。
- ・仕事のしがらみがなく素の自分を出せる場であり、地域を超えた交流ができる利点を伸ばしたい。
- ・修了生は向上心を持っているので、学んで終わりではなく、学んだことをどのように社会貢献へ生かせるのか、どのように社会参加につなげることができるのかが課題。

3. 所感

- 毎年の募集において、定員をはるかにオーバーするほどの応募があり、関心の高さが伺える。受講生の満足度も高いものであった。居住地域の市民センターでの生涯学習参加を避けたり、都心への定期的な外出を理由としたり、都心で参加する生涯学習にはそれなりの意義があるようだ。
- 運営側へのヒアリングでは、設立 20 年の蓄積もあって、運営方法がかなりこなれている印象で、安定感を感じることができた。
- 今回のヒアリングはすでに関係している受講生が対象だったが、知り合いのシニア層数人にヒアリングしたところ、まず豊齢学園の存在を知っている人が皆無であった。また、学園の概要を説明すると、関心はあるが、学習のレベルや時間的余裕が心配で、概ね参加のハードルが高いと感じているようであった。

調査日：平成 28 年 11 月 8 日（火）

施設名：生涯学習支援センター（事業名：仙台明治青年大学）

参加者：阿部清人委員、男澤亨委員、佐藤美佳子委員、渡邊千恵子副委員長

対応者：生涯学習支援センター 佐藤センター長、會田主任

仙台明治青年大学受講生 3 名（男性）

1. 高齢者（関連）事業の現状

(1) 事業について

- ・市民センターの老壮大学やシルバーセンターのせんだい豊齢学園を修了した高齢者（61 歳以上の市内在住者）がさらに学習を深める会。
- ・昭和 41 年に、大学院のような性格のものとして創立された経緯がある。
- ・平成 28 年度は約 810 名が在籍し、月に 2 回の学習会は、太白区文化センター楽楽楽ホールで開講している。
- ・新入生は毎年 70～80 名で、希望者は 130 名から 150 名のところ、抽選で選抜している。震災以降、入学希望者が増加している。
- ・自主運営が基本で、せんだい豊齢学園は定食であると例えると、明治青年大学は自分でメニューを作るところが異なる。
- ・学習、クラブ、同期会が活動の三本の柱で、クラブは 21、同期会組織も会員の親交を深めるなど重要な役割を果たしている。

(2) 企画運営について

【学習カリキュラム】

- ・運営委員会は 31 名で構成され、月 2 回実施し、カリキュラムの立案、資料印刷などを担当している。
- ・うち約 10 名が、学習カリキュラム委員会となっている。6 月に開催された第 1 回委員会では、学習テーマを「学生に共通なテーマで分かりやすい」「楽しさ」「話題性」「郷土・歴史に関わる」「生きがい」等の条件から選定することになった。
- ・対話集会という時間があるが、運営等に関するテーマを設定し、小規模のメンバー間の意見交換会から、全体集会へと発展させており、会員のニーズを汲み上げている。

【予算】

- ・受講生の会費は年間 7,000 円。会場費、同期会運営費、クラブ運営費、システム代、印刷用紙代、大学祭費用などで消費している。
- ・仙台市の事業費としては、60 万円を支出し、講師謝礼 30 万円、その他は開講式・閉講式、大学祭、通信費などに消費している。

【生涯学習支援センターの支援】

- ・業務としては、講師対応、資料運搬、学習会の運営を担当し、楽楽楽ホールの優先

利用制度を活用している。

(3) 受講生について

【活動に対する考え方】

- ・教育をもじって、「今日行くところがある」ことが生きがいと捉えられる。
- ・学びを続ける意義として、学びを継続して行うことは、健康寿命をのばすことにつながる。
- ・出席しないのに在籍し続ける人もいるが、これは帰属意識を涵養するという意義があつて重要なこと。余力があれば活動することによい。

2. 高齢者（関連）事業の課題

(1) 企画運営について

- ・カリキュラムに関して、受講生に対してアンケートを実施しているが、回収率は5%程度と低い。
- ・上記にも関連するが、運営の参画に積極的でない受け身の受講者もいる。
- ・運営委員会はボランティアであることへの理解が得られない。やって当たり前と考える人もいる。

(2) 受講生について

- ・入学者の平均年齢が71歳（平成28年）と、高齢化が課題。

3. 所感

- ・50年の歴史を誇っており、老壮大学及びせんだい豊齢学園の修了生の受け皿となる生涯学習組織として貴重かつ重要な役割を果たしている。
- ・自主運営組織であり、マンネリを恐れず、また会員のニーズ把握にも工夫をこらしており、安定感を感じることができた。高齢者が役割を持つことに、生きがいが生まれていることを再確認もできた。
- ・一方で、カリキュラムや講師の選定は、授業の満足度が影響する可能性が高く、健康関連のテーマが定番となるなど、多少硬直的な傾向も感じられ、またそれが前期高齢者の参加の少ない要因のひとつではないかとも思った。
- ・また、せんだい豊齢学園では、大学との連携によって、若い学生と高齢者との接点ができ、お互いに刺激がある点に言及したが、仙台明治青年大学においては、学都仙台コンソーシアムや大学の利用などによる新しいカリキュラムの創生や社会のトレンドの啓発などの検討も図られるべきではないかと思料した。

調査日：平成 28 年 12 月 7 日（水）

施設名：東中田市民センター

参加者：阿部清人委員、男澤亨委員、佐藤美佳子委員

対応者：東中田市民センター 工藤館長、石垣主任、大野係員

老壮大学受講生 1 名（男性）、かっこ語りの会会員 1 名（女性）

1. 老壮大学

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・受講生は 60 歳以上の 76 名で、うち男性 14 名、女性 62 名。今年度の新入会員は 12 名で 84%が前年度以前からの継続である。分かる範囲で最長で 12 年継続した参加者がいる。
- ・受講生から徴収する会費は年間 1,000 円。

②企画運営について

- ・原則として毎月 1 回 13:30～15:00 に講座を行っている。テーマは健康管理、歴史、交通・防災など。
- ・年 1 回開催される文化祭が最大の行事で、自主企画と自主運営により作品展示と舞台発表が繰り広げられる。
- ・年度末には文芸と活動の振り返りを掲載した文集を発行。
- ・開催時間を午後に行っている。机の移動などレイアウト変更の作業が必要なので、午後の方が都合がよい。
- ・10 名程度の 8 班に分かれ、受講受付、班活動や班長会議などの役割を分担している。
- ・館外学習が年 1 回開催される。費用は参加者の負担。参加者の希望を調査する一方、交通の便が悪いことから高齢者へ配慮し、身体への負担を減らした内容を考慮している。

③受講生について

- ・退会者は、平成 28 年 12 月時点で体調不良の理由による 1 名のみであり、ほとんどいない。参加者の顔ぶれは変わらないが、勝手に分かっている効率的に進められるメリットがある。
- ・同じ班に知り合いがいるからこそ参加している人もいる。入会することで友だちが増える人もいる。
- ・この地域は町内会も年配の人で運営されており、非常によくまとまっている。
- ・年間 1,000 円の受講料は魅力的。

(2) 高齢者（関連）事業の課題

①企画運営について

- ・新しい人にも参加してほしい気持ちはあるが、仲のいい人がいないと参加したり継続したりできないようだ。
- ・例えば、受講期間を 2 年間などと期限をつけた場合、交通機関の不便などの理由で、当地域では他に参加できる選択肢が少ない。
- ・当市民センターは会議室が狭いので、机を使用せずにイスだけにしても 80 人が限界。定員は 60 人。
- ・老壮大学の回数を増やすとすると、ほかに市民センターを使用している団体が部屋をとれなくなり活動に支障が出る。
- ・運営規約が存在せず、平成 27 年に作成した。

②受講生について

- ・中心になっているのは 70～75 歳。60 歳代は親の介護などがあるためか参加が少ない。
- ・役員のなり手がいない。

(3) 所感

- ・老壮大学においては、学習して生活に取り入れることもさることながら、毎月 1 回、地域の高齢者が集ってコミュニケーションを図る役割が大きいようだ。毎年同じような事業でマンネリ化しているが、それは問題ではなく、むしろ運営の簡素化や役員の負担の最小化に貢献しており合理的ではないかと感じた。一方、交通機関、老老介護、町内会のまとまりなど地域の性格や課題が、活動を制限している大きな要因になっている。

2. かにっこ語りの会

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・東中田地域に昔から伝わる歴史や暮らしの話を伝承していくために、語り手を養成する講座。語りを通して、地域住民が地域を知る機会を増やすことが目的。
- ・市民センターの複数年事業として、平成 25 年度から実施。歴史が古く伝説が残る地域なので、市民センターとして掘り起こせないかという流れがあって開始された。
- ・現在、主に活動をしているのは 40～70 歳代の女性 6 名。

②企画運営について

- ・地域の歴史の掘り起こしに加えて、併設する児童館、小学校、中学校など様々な出会いや協働事業があって現在に至っている。小学校の地域の歴史学習の講師をすることになって活動が活発化し、平成 28 年度は語りの会が作った文章を基に中

学校美術部有志と紙芝居作りを行っている。

- ・複数年事業としての予算は平成 29 年度で終了するが、その後も何らかの形で継続していきたいと考えている。

③受講生について

- ・この地域に居住し、地形の素朴な疑問から地域のことを調べ始めた。地域を知ることに関心を覚えている。

(2) 高齢者（関連）事業の課題

①受講生について

- ・事業開始した平成 25 年の当初は 15 名の参加者がいたが、活動のコンセプトを模索しており、はっきりしていなかったため、途中で離れてしまった人がいるのが残念。

(3) 所感

- ・かっこ語りの会は歴史の古い地域という特性を生かし、新旧の住民が協働で地域の成り立ちや先人の生活を知るというすばらしい事業である。子どもと高齢者が関わることも多く、他の市民センターも取り入れるべきであろう。地域の昔の生活を語る活動として参加したが活動の場がないなど、当初のもくろみと活動内容が異なってきたことから、参加者の一部が離れているという現状もあるが、そういった活動の方向へも多角的に発展させる価値があると思われるので、ぜひ検討してほしい。他所で子ども時代を過ごして当地域に住んでいる人々と、地域による違いを語り合うなど、活動の発展も可能と考える。

○学校支援地域本部部会

1. 部会員

近澤裕子委員（部会長）、菊地崇良委員、佐藤亜矢子委員、渡辺祥子委員

2. 訪問先施設

- ・ 第1回調査：加茂中学校区学校支援地域本部
- ・ 第2回調査：沖野市民センター
- ・ 第3回調査：袋原小学校学校支援地域本部

*それぞれの調査結果は39ページ以降

3. ヒアリング調査結果（総評）

(1) 高齢者の学習と社会参加の現状

①学校支援地域本部

学校担当のコーディネーターが、学校の要望とボランティアとして活動する人の性格や能力を踏まえて、うまくマッチングすることができているため、ボランティアとして参加している高齢者がやりがいや達成感を持って活動することができている。また、ボランティアで参加した高齢者同士や高齢者と児童生徒とが名前呼び合える関係性が構築されることにより、災害発生時の共助の素地づくりの一助にもなっている。

②市民センターの関連事業

参加する高齢者は、家の外に出ることや高齢者同士や児童等との相互のコミュニケーションをとることを楽しいと感じている状況がうかがえた。一方で、地域コミュニティの基盤となる町内会を担う高齢者は、高齢者だけでなく壮年世代による地域活性化の必要性を感じている状況がある。

(2) 高齢者の学習と社会参加の課題

①学校支援地域本部の活動に関して

今回取材した2校とも、学校支援地域本部の核となる学校コーディネーター（担当者）が、地域の状況や人材・人柄まで把握していて地域住民からも人望のある方たちであった。今後、世代交替をスムーズにするためには、地域の高齢者と学校とをつなぐコーディネーターの後継者を段階的に育成することが課題である。

②市民センターの関連事業に関して

市民センター主催の事業や関連行事に積極的に関わろうとする高齢者と全く参加しない高齢者に二極化している。また、参加意欲のある高齢者が路線バスの本数減少により参加できなくなっている例もある。

(3) 高齢者の学習と社会参加促進のために考えられる施策・取組み等

高齢者の学校ボランティアというと一般に登下校時の見守りや昔遊びの授業支援等のイメージを持たれがちであるが、小 1 サポーター、小学校の授業補助や放課後教室（遊びや宿題の支援）、中学校の放課後教室（学習支援）等のニーズもある。学校のニーズが定年まで就いていた職種や趣味・特技と合致すれば、高齢者にとって、学校支援はやり甲斐や達成感を感じられる社会参加になると捉えた。

仙台市の学校支援地域本部事業は、現在、「地域とともに歩む学校」の視点で中学校区ごとに拡充を進められているが、高齢者も利益を享受できることから、今後は、高齢者の社会参画の視点からもより一層の活性化を期待する。

調査日：平成 28 年 9 月 6 日（火）

施設名：加茂中学校区学校支援地域本部

参加者：佐藤亜矢子委員、近澤裕子委員、渡辺祥子委員

対応者：加茂中学校区学校支援地域本部スーパーバイザー 野澤氏

〃 加茂中学校担当コーディネーター 齋藤氏

〃 虹の丘小学校担当 〃 大場氏

〃 加茂小学校担当 〃 佐藤氏

* 対応者 4 名は 50 代～60 代であるが、高齢者ではない。

1. 高齢者（関連）事業の現状

(1) 事業について

- ・ 運営費を仙台市が負担している事業。
- ・ 各学校からの要請を受け、各校担当のコーディネーターが学校の要望にかなう人物を地域から探し、ボランティアとして依頼するシステム。このボランティアの中に高齢者も含まれる。

(2) 企画運営について

- ・ 学校の要請を受けてから動き出す。
- ・ 数年継続でボランティアをお願いしている内容もある。
- ・ 学校の担当者ボランティアとで必ず事前打合会を持っている。

(3) 受講者・参加者について

- ・ 学校に入るボランティアは、各校のコーディネーターが学校の要望に合わせて性格や能力も含めて適材適所の人選を行い、選ばれた地域の方々。
- ・ 高齢者の男女比は、若干女性が多いが男女ほぼ同等とのこと。
- ・ 学校からの特殊な要請、例えば中学校の数学の放課後教室の学習ボランティアの場合には、現役時代に理数系の仕事の第一線で活躍された男性も多いそうである。
- ・ 高齢者が参加しているボランティアの主な内容は下記の通り。

中学校…学習ボランティア、部活動サポーター、短歌・絵手紙・書道ボランティア、総合的な学習の時間や文化祭の演目の講師（太鼓・剣舞）

小学校…小 1 サポーター、学習発表会時の 1 年生の児童管理補助、生活科昔の遊びの講師、家庭科ミシン裁縫補助、総合的な学習の時間の講師（自分の町の先生、郷土料理を作ろう、スチューデントシティボランティア）、懇談会時の児童預かり（学童のみ）、夏休み明け応募作品の仕分け補助

2. 高齢者（関連）事業の課題

(1) 企画運営について

- ・ 学校支援地域本部は、学校の要請で動くため、現段階では特に課題はない。

(2) 受講者・参加者について

【参加者（ボランティア）について】

- ・学校の要望とボランティアの性格や能力を踏まえて、適任の人材をうまくマッチングしている実績があるため、3校の校長はそれぞれ安心して人選をお任せしており、特に課題は感じていないそうである。

【地域支援本部のコーディネーターについて】

- ・コーディネーターには、ボランティアを人選する際に性格や能力適正を見抜く力が必要であり、また、広く地域の人材を知り得ている人物であることが必要条件となる。現段階では課題はないが、近い将来、コーディネーターが交替する際には、人選の難しさが予想される。

3. 所感

(1) 高齢者の満足度

ボランティアに参加した高齢者から、コーディネーターに「孫も遠くにいるので、子供たちと触れ合えて、ボランティアの声掛けをしていただけてよかった。」「今時の学校への理解が深まってよかった。」という声が届いているそうである。お店で買い物をしている時に、子供たちから「〇〇先生」と呼ばれて驚きつつも嬉しかった、ボランティアに通っていたら家族から「このごろ何だか生き生きしているね。」と言われた等のエピソードもうかがった。

(2) 特定の分野の能力の高い方々の活躍の場

中学校の数学に特化した放課後指導の学習ボランティアや小学校の家庭科の裁縫の学習補助等、特定の分野に長けた高齢者にとって、自己実現の場としての役割を果たしているように感じた。

(3) 地域コミュニティの活性化

学校を介して地域の高齢者が若い世代の人たちと顔見知りになり名前呼び合える関係性を構築することにより、地域の安心感や地域の熟成という役割も担っている。このことが、災害発生時の共助の素地づくりの一助にもなっていると思われる。

(4) 高齢者の友達の輪の広がり

ボランティアとして選ばれた高齢者がその友達に声を掛け、コーディネーターに紹介するという流れもできているとのことである。

調査日：平成 28 年 10 月 12 日（水）

施設名：沖野市民センター

参加者：菊地崇良委員、佐藤亜矢子委員、近澤裕子委員、渡辺祥子委員

対応者：沖野市民センター 高橋館長

沖野耕友大学 染谷運営委員長、沖野地区沖野ひまわり会 山口会長

沖野老人福祉センター 高橋館長、沖野地域包括支援センター 荒若所長

1. 沖野市民センター高齢者関連事業

- ・沖野市民センターでは、平成 28 年度の 20 事業のうち、同市民センターを開催場所とした『伝えよう仙台七夕』『沖野耕友大学』『沖野市民まつり』といった高齢者（関連）事業が企画・運営されている。（年間の利用者数：約 8 万人）
- ・同地区においては、小中学校連携のモデルともなった沖野学園（沖野中・沖野小・沖野東小）単位で行事・活動を 1 つのカレンダーにまとめ、情報共有を図るとともに、行事等が重複しないように調整している。
- ・一方、近隣の施設である沖野老人福祉センターや沖野地域包括支援センター、沖野市民センターでの高齢者（関連）事業の取組み内容が重複することはあるが、全体調整の場は特に設けられていない。（手厚い対応を重んじ、重複は厭わず、個別に調整を行っている。）

2. 沖野耕友大学

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・年 11 回の講義（受講形式）により様々な内容を実施。（介護予防や認知症などの知識を得ることができるような機会の提供にも留意。）
※受講生は、開催しているイベントを自由に選択し、それぞれ任意で参加。
- ・現在は、94 名の学生が在籍している。現況では 1 回の講義で 70 名程度が参加。
- ・講義とは別に、パソコン、パークゴルフ、合唱など 6 種のクラブを設置。（年度初めに希望者で構成。）
- ・1 年間の活動記録と個人の投稿による文集「耕し」を年度末に作成している。（現在 15 号まで発行。編集作業は役員による。）

②企画運営について

- ・運営委員長などの役員を選出し、自主運営が基本。
- ・活動に活用し得る情報は、運営委員長が市民センター（3 日に 1 度程度）で入手している。（耕友大学として組織的・積極的に情報を集めたりはしていない。）
- ・年会費は 1,000 円。移動研修等については参加者から随時徴収している。

③受講者・参加者について

- ・1年毎に学生を更新しており、会場設営の当番等、講座運営に積極的に関わってもらうため、学生の地域や年齢等に関わらないランダムな人選による通年固定の班を7つ編成している。(新たなコミュニケーションを図ることが狙い。)

※班ごとに、定例の講義とは別に、独自の学びやレクレーションの機会をつくり、活動を行っている。

(2) 高齢者（関連）事業の課題

①企画運営について

- ・沖野耕友大学と町内会の連携は、特にない。(参加者の中に町内会の役員がいるため、その関係上での個人的相互交流は図られている状況。)
- ・学校との連携事業の実施は、市民センターと学校との連携状況が大きく影響するため、市民センターと学校とがより一層連携を図ることが必要。

②受講者・参加者について

- ・市民センター施設の物理的都合から、学生数は制限されている。
- ・現在の年齢構成は、65歳未満5%、65歳～69歳が24%、70歳～74歳が30%、75歳～79歳が23%、80歳以上が16%であり、60代の参加が少ない。

(3) 所 感

- ・地域や、本大学の中から講師となる人が輩出されるようになることが望ましく、他事業や活動への講師等派遣ができるような人材バンクとしての役割も期待できる。
- ・子どもと高齢者との関わりは一定程度あるが、今の子育て世代を巻き込んだ関わりが更に必要となるのではないか。
- ・今後、主力である団塊の世代の高齢化が進むと、実動力の低下が懸念される。
- ・将来の高齢者人口増加に向けた、受入施設である市民センター等のキャパシティ拡大や市民センター以外での集会・活動の場の確保が必要となろう。

3. 沖野市民センター関係団体

(1) 沖野地区老人クラブ連合会

①高齢者（関連）事業の現状

ア) 事業について

- ・年間10回程度のスポーツ行事や研修旅行、誕生日会（年4回）などを実施。
- ・沖野東小学校との連携事業として、七夕飾りの行事（市民センター主催）、プランターへの花植え（6・8月。町内会主導）、縄ないやしめ縄などの昔あそびの行事（2月。学校支援地域本部いなご会主導）を実施している。

イ) 企画運営について

- ・活動に資する情報は、各小中学校が月1回発行し、町内会で回覧される学校だよりから主に収集している。
- ・会費なし。仙台市及び町内会の助成で運営。運営費は年間10万円程度。

ウ) 受講者・参加者について

- ・仙台市老人クラブ連合に加盟。3 老人クラブで 180 名加入しており、70 代の参加者が主であり、特に女性が多い。(実態として町内会活動の実働の主力。)

②高齢者（関連）事業の課題

ア) 企画運営について

- ・市は 70 名を上限とし、老人クラブへの助成額の上限を設定しているため、参加者増へ経費的な対応は困難である。

イ) 受講者・参加者について

- ・地下鉄東西線開業に伴うバスの便の減少により移動手段が十分でなくなり、参加したくでもできない人が発生している。

③所 感

- ・学校との連携事業は、子どもと老人クラブ参加者がともに楽しんでいる。老人クラブ参加者は、子どもに教えることで満足感や自己肯定感を感じている。
- ・参加者は、ひきこもることより外に出ること、相互のコミュニケーションを楽しんでいると感じており、機会付与と創出のための努力が求められている。
- ・参加者の一部は、通学路見守りの学校ボランティア（10 年間等）に従事しており、児童生徒との良好な関係を構築している場合もある。老人クラブの活動を通じ学校に接してきたことが、児童生徒の安全・安心や健全育成のための見守りなどの参画意識を醸成し、その機会を促進していると言えるのではないか。
- ・地域コミュニティの基礎である町内会の実働を担う高齢者は、壮年世代による地域活動参加の必要性を感じている。老人クラブ等の活動を通じてより一層の世代間交流の促進を図るとはできないか。

(2) 沖野老人福祉センター

①高齢者（関連）事業の現状

ア) 施設の事業について

- ・学びたい、生き生き生活したいという人が、認知症予防や脳トレなどで来所。
- ・趣味の教室などでは利用者が講師になるよう工夫をしている。
- ・児童館が併設されているため、将棋や料理を利用者が子どもに教える機会も設定している。(会場は、市民センターや学校で行っている。)

イ) 企画運営について

- ・以前、市民センター行事で餅つき大会を実施し、子どもたちを招待したが、もっと一緒にできることがないかと検討し、一緒に海苔巻を作り、食べるというような行事を実施するようになった。現状として市民センターが企画運営のパイプ役を担っている。
- ・夏祭りでは、おはじきなどの昔遊びコーナーで、高齢者と子どもが関わる場を意識して設定している。

- ・高齢者に係るイベント情報は、10 町内会にセンター便りを通じて広報。
- ウ) 受講者・参加者について
 - ・沖野地区所在の高齢者が年間約 3 万人利用。1 日当たり 100 人程度が利用しており、利用者のうち 2/3 は施設内にあるお風呂を目的（魅力）として来館している。
- ②高齢者（関連）事業の課題
 - ア) 企画運営について
 - ・更に子どもたちと高齢者が関わるようなイベントを検討している。
 - イ) 受講者・参加者について
 - ・遠方居住者のための交通手段の充実について検討が必要である。
- ③所 感
 - ・核家族化が進んでいるため、子どもが高齢者に接する貴重な機会となっている。利用者も子どもと接するのを楽しみにしており、双方にとって得るものが多々見出せるため、取組み効果について改めて整理する価値があると考えます。
 - ・センター内に区老人クラブ連合会の事務所ができる予定。それに伴い今後の連携強化が期待できるのではないかと。

(3) 沖野地域包括支援センター

- ①高齢者（関連）事業の現状
 - ア) 施設の事業について
 - ・介護予防講座を実施。
 - ・沖野小 4 年生の総合学習の時間において、地域の認知症に対する理解を広げるために講話をしたり、地域ぐるみで介護予防に取り組むため、運動サポーター養成研修会を開催したりしている。
 - イ) 企画運営について
 - ・仙台市の委託で実施。
 - ・地域包括支援センターへ相談があった方以外にも、老人クラブ（会）、町内会などを通じて、より多くの方が参加できるように広報すると同時に、各団体主催の会に講師として参加している。
 - ウ) 受講者・参加者について
 - ・多数が 70 代。
- ②高齢者（関連）事業の課題
 - ア) 企画運営について
 - ・サロンなどを開催する場としての学校施設の利用は未調整である。
 - ・沖野地域は 16%が介護認定を受けており、残り 80%の人にいかに元気でいてもらえるかが地域課題となっている。
 - イ) 受講者・参加者について

- ・ 沖野UR団地などは、集会所があるがサロンがないため、症状が悪化してから相談に来るケースが多い。早期対処、未然防止を図るための人が集える場所が必要。
- ・ バスの便数の減少によって、各事業への高齢者による参加への制約が大きくなっている。
- ・ 家から出て来ない人の対応が困難で課題。閉じこもることによって筋力が落ち、介護状態が悪化・進捗してしまう危険性がある。

③所 感

- ・ 比較的容易に歩行して通うことができる範囲に、サロンなどの活動拠点が複数設置されることが、更に求められるのではないか。

調査日：平成 28 年 12 月 5 日（月）

施設名：袋原小学校学校支援地域本部

参加者：近澤裕子委員、渡辺祥子委員、佐藤亜矢子委員

対応者：袋原小学校 橋本校長、大場教頭、黒須教頭、山口主幹、鈴木教務主任

1. 袋原小学校学校支援地域本部事業

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・運営費を仙台市が負担している事業。
- ・学校からの要請を受け、スーパーバイザー、コーディネーターが学校の要望にかなう人物を地域から探し、ボランティアとして依頼する。このボランティアの中に高齢者も含まれる。
- ・アフタースクール活動もこの事業の中の 1 企画。

②企画運営について

- ・学年主任と綿密に打合せをし、学校の要請という形で動く。
- ・スーパーバイザーは職員室に机があり週 3 日は職員室の机で勤務。別に会議室もあり打合会などを行っている。

③受講者・参加者について

- ・学校に入るボランティアは、スーパーバイザー、コーディネーターが学校の要望に合わせて適材適所の人選を行い、声かけをしている。
- ・高齢者が参加しているボランティアの主な内容は下記の通り。
 - 1 年生…1 年サポーター、交通教室補助、校外学習引率補助、さつまいも（地域の畑の苗植え、収穫）
 - 2 年生…まち探検の引率補助、さつまいも（地域の畑の苗植え、収穫）
 - 3 年生…まち探検、人から学ぶ（ボランティアしている人に話を聞く（活動のやりがいなど）、豆腐作り（地域の豆腐屋さん（ゲストティーチャー））
 - 5 年生…田んぼのお手伝い（地域の田んぼ 30m×50m）
 - 5、6 年生…ミシンボランティア補助
 - その他…アフタースクール活動、就学時検診・健康診断（1 年～6 年）のお手伝い（記録の補助）、クラブ活動、みどりの指導、ゲストティーチャー、防犯ボランティア（285 人（各町内会から））

(2) 高齢者（関連）事業の課題

①企画運営について

- ・学校支援地域本部は、学校の要請で動くため、現段階では特に課題はない。

②参加者（ボランティア）について

- ・町内会、学区民体育振興会、防犯ボランティア、民生委員ほか学校に関わろうと積極的な方が地域に多く、特に課題は感じていないそうである。

③地域支援本部のスーパーバイザー、コーディネーターについて

- ・現段階では年齢層、性別共にバランスがよく、特に課題は感じていないそうである。また、コーディネーターが交替する際にもスムーズな人選ができています。
- ・スーパーバイザーについては交代する際に人選の難しさが予想される。

(3) 所感

①高齢者の満足度

- ・アフタースクール活動と同様、児童と接することが楽しみにになり、楽しみの枠を越えて高齢者の生きがいになっている。

②地域コミュニティの活性化

- ・平成 28 年 12 月時点の児童数は 906 名であるが、平成 29 年には 935～940 名になることが予想され、これからも益々各学年で地域からの協力が必要とされている。保護者も参加する活動など学校支援地域本部が橋渡しとなり、地域の高齢者が若い世代の人たちとともに活動する機会もできると感じた。

③高齢者の友達の輪の広がり

- ・地域で防犯ボランティアや民生委員など他のボランティア活動をしている方々も多く、そのつながりで高齢者同士が声を掛け合い、活動に参加していくことも多いと感じた。

2. アフタースクール事業（放課後子ども教室）について

※視察の際に 30 分ほど見学

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・学校支援地域本部の活動の中の 1 企画であり、学校支援地域本部が運営委員会事務局となっている。

②企画運営について

- ・年度初めに袋原アフタースクール運営委員会にて活動内容を決め、登録指導者を募集する。運営委員会は、学校、講師、事務局で構成されている。

③受講者・参加者について

- ・年度初めに指導者登録を行い活動する。高齢者の男女比は、グラウンドゴルフは男性が多く、昔あそびは女性が多いなど活動内容によって違う。
- ・児童の参加者は、毎回自由参加。（吹奏楽サークルとカンフーサークルはサークル活動のため、年度初めにメンバーを募集し登録する。）
- ・高齢者が参加しているボランティアの主な内容は下記の通り。

活動内容	会場	回数	参加児童	指導者登録
1. 吹奏楽サークル	音楽室	年 21 回	登録制	1 名
2. カンフーサークル	体育館	年 21 回	登録制	カンフースクール講師
3. 昔遊び (コマ廻し、けん玉、折り紙、ビー玉、羽根つき、缶ポックリ等)	家庭科室	年 14 回	自由参加	10 名 (民生委員)
4. はら小キッズ (将棋・ゲーム・宿題等)	視聴覚室	年 21 回	自由参加	2 名
5. グラウンドゴルフ	校庭	年 7 回	自由参加	32 名 (学区民体育振興会、防犯ボランティアなど様々)
6. 放課後図書館開放	図書館	年 37 回	自由参加	

④学校側の働き

- ・年度初めのお知らせを全児童に配布
- ・場所の提供 (校庭の半分、教室、体育館)
- ・昼の放送での働きかけ

(2) 高齢者 (関連) 事業の課題

①企画運営について

- ・もっと開放したいが児童数の増加により活動に使用可能な教室が 3 つしかないというジレンマがある。活動場所の確保がなかなかできない。

②参加者 (ボランティア) について

- ・町内会、学区民体育振興会、防犯ボランティア、民生委員ほか学校に関わろうと積極的な方が地域に多く、特に課題は感じていないそうである。

③アフタースクール運営委員会事務局について

- ・平成 26 年度までは土曜日開催であったが、塾や家庭の予定などで参加者が少なかったことから、平成 27 年度より平日 (現在は、月曜の放課後) に実施することとなり、今年で平日開催 2 年目。土曜日から平日実施に変わったことにより可能性として何ができるか、次年度の見通しを立てる必要がある。

(3) 所感

①高齢者の満足度

- ・指導する側として登録して活動することで、児童と接することが楽しみになり、楽しみの枠を越えて高齢者の生きがいになっている。
- ・昔遊びなどなかなか家庭ではできないことを伝えていきたいという自負も感じている。

②高齢者の友達の輪の広がり

- ・ボランティアとして登録し活動の回数を重ねる中で連帯感も生まれる。

③児童にとっても異学年の交流の場

- ・教室ではなかなか見られない児童の表情がみられる。

④地域コミュニティの活性化

- ・児童と地域の高齢者が遊びなど活動を通して顔見知りになることができ、地域でも児童にあいさつや声かけができる関係になれる。ある登録指導者からは、児童について気付いたことを学校へ話したりすることができるようになったとの意見もあった。
- ・一人でも多くの子どもが放課後を有意義に過ごせるように学校と地域が一体となって活動が続けていこうとする姿勢がうかがえた。

○社会教育施設部会

1. 部会員

小形美樹委員（部会長）、佐々木啓子委員、庄司弘美委員、高橋満委員長

2. 訪問先施設

- ・第1回調査：博物館
 - ・第2回調査：折立市民センター
 - ・第3回調査：太白図書館
- ※それぞれの調査結果は52ページ以降

3. ヒアリング調査結果（総評）

(1) 高齢者の学習と社会参加の現状

今回の社会教育施設部会で調査対象とした3施設における高齢者の活動に関する共通点は以下のとおりである。

- ①活動は高齢者を対象としたものではないが、結果として高齢者の参加が多くなる。
- ②高齢者は意欲的、積極的に活動し、自助努力を行っていることが多い。
- ③長期間活動している人が多い。
- ④他のボランティア団体にも所属するなど活動を掛け持ちしている人が多い。
- ⑤男性はほとんど定年退職をきっかけに活動を始める。
- ⑥メンバーが誘い合って参加することが多い。
- ⑦活動により人とのコミュニケーションができることに喜びを感じる。

なお、相違点は以下のとおりである。

- ①博物館ボランティアと折立市民センターの活動参加者はメンバーの職歴等個人的なことについてはお互いに触れることがないが、図書館の読み聞かせボランティアについてはそれぞれの家庭事情を知り配慮するなどの関係性があった。前者は男女比が半々、後者は女性のみの参加であることが理由かもしれない。
- ②施設側と受講者・参加者側との関わり方は、博物館のボランティアと折立市民センターのプログラムについては、施設側が企画・運営・広報等について密に関わるのに対し、太白図書館の読み聞かせボランティアについては、図書館側は情報や会場の提供という形で関わっている。前者が施設主導で活動が始まったのに対し、後者については、読み聞かせボランティアの養成講座に参加したメンバーによって自主的に立ち上げられた独立した団体であることが理由のようである。

(2) 高齢者の学習と社会参加の課題

3施設とも課題として挙げているのは、メンバーが高齢化及び固定化する傾向があり、新規会員が入会しにくくなっていることである。博物館は年齢制限を設けるか否かな

ども検討してきた。

博物館と折立市民センターでは結果として高齢者の参加が多くなっていることにより、活動中の体調管理や安全確保について気を配っている。

また、調査対象者の中には家族の理解が得られないことを指摘する人もいた。

(3) 高齢者の学習と社会参加促進のために考えられる施策・取組み等

3施設の企画運営側及び参加者側から共通して出た意見は、新規会員の募集や開拓の仕方の工夫、企画運営側との情報交換を密にすること、研修等の実施の必要性などであった。それぞれの社会教育施設の特徴があるので、活動に対する支援体制の仕方が違うが、ボランティアや受講者の自主的な取組みを地域の活動などにつなげる仕組みができるとうい。

博物館ボランティア、図書ボランティアは個人の得意分野での活動で、自己実現という、より充実感のある活動であると感じた。今後は人材を育てることも活動の中に入れていく必要がある。また、老壮大学の運営委員は、市民センターで掛け持ちして役割を担う方が多いことから、地域のキーパーソンになっている。市民センターだけの活動に終わらず、防災等でも大切なつながり（顔の見える付き合い）ができていると感じた。世代間交流もあり、連携は今後増えていくとよいと思う。参加者一人ひとりの知恵を地域に活かしていくためにも、これからますます声を掛け合い、誘い合って会員を増やしていくことが大切だと考える。

多様な参加者が活動に加わりやすいように、それぞれの施設での活動や取組みをもっと発信してはどうか。今後は女性も男性と同様に定年退職後に地域の活動に参加するなどということが増えると考えられ、社会教育施設でいろいろな活動を行っていることを知らない人がより多くなると思われる。社会教育施設での学習や社会参加が魅力的であることをもっと広報してもよいのではないか。

調査日：平成 28 年 9 月 4 日（日）

施設名：博物館

参加者：小形美樹委員、佐々木啓子委員、庄司弘美委員、高橋満委員長

対応者：博物館 学芸普及室 山澤指導主事

博物館ボランティア 3 名

1. 高齢者（関連）事業の現状

(1) 事業について

博物館ボランティアは、高齢者を対象とした事業ではないが、その構成員は 60 代・70 代が多い。

①施設の事業	博物館ボランティア（三の丸会）																																								
②企画運営	<p>展示解説を行うボランティアで平成 9 年に組織され、平成 28 年の登録者は 120 名。</p> <p>活動班（各班 10 人～11 人の 12 班）に分かれ、2 週間に 1 回程度活動。活動内容は常設展示室での資料解説が主で、他にもプレイミュージアムでの活動補助、館庭（三の丸跡）案内をしている。</p> <p>会員は活動班のほかに、運営部、研修部、会報部、英語部、資料部の 5 つの部会のいずれかに所属し活動している。</p> <p>会の運営や情報交換は月 1 回の役員会で行われる。</p> <p>任期は 5 年で任期後の再応募は妨げないが連続した活動は 10 年まで、10 年活動後は一度退会する。</p>																																								
③参加者（会員）	<table border="1"><thead><tr><th colspan="4">H28博物館ボランティア年齢構成</th></tr><tr><th>年代</th><th>男性</th><th>女性</th><th>合計</th></tr></thead><tbody><tr><td>20代</td><td>1</td><td>3</td><td>4</td></tr><tr><td>30代</td><td>1</td><td>0</td><td>1</td></tr><tr><td>40代</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>50代</td><td>2</td><td>10</td><td>12</td></tr><tr><td>60代</td><td>31</td><td>29</td><td>60</td></tr><tr><td>70代</td><td>26</td><td>11</td><td>37</td></tr><tr><td>80代</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>合計</td><td>63</td><td>57</td><td>120</td></tr></tbody></table> <p>他に、博物館では一般向けに特別展関連の記念講演会や、しろ・まち講座など様々な講座・講演会を行っているが、参加者は 60 代・70 代の高齢者の参加が多い。</p>	H28博物館ボランティア年齢構成				年代	男性	女性	合計	20代	1	3	4	30代	1	0	1	40代	1	2	3	50代	2	10	12	60代	31	29	60	70代	26	11	37	80代	1	2	3	合計	63	57	120
H28博物館ボランティア年齢構成																																									
年代	男性	女性	合計																																						
20代	1	3	4																																						
30代	1	0	1																																						
40代	1	2	3																																						
50代	2	10	12																																						
60代	31	29	60																																						
70代	26	11	37																																						
80代	1	2	3																																						
合計	63	57	120																																						

※仙台市博物館年報第 43 号 平成 27 年度、博物館ホームページ、平成 28 年 9 月 4 日のボランティアへのインタビュー調査より作成。

(2) 企画運営について

【高齢者学習プログラム】

- ・高齢者を対象にした特別のものはないが、実際には高齢者が多く参加するので、高齢者に配慮している。

【ボランティア参加者の様子】

- ・一般向けの講座に進んで参加し勉強するなど意欲的である。昼休みに勉強会をしている班もあり、まるで大学のゼミようである。学校教育と自分の要求で学ぶ生涯学習の違いを感じる。

【ボランティアへの支援体制】

- ・ボランティア養成講座を開催している。他にも平成25年から生涯学習課、科学館等と連携し、博物館等施設ボランティア研修を実施している。接遇研修や各施設のボランティアの事例紹介なども行った。

【自主的な取組みや情報提供の方法など】

- ・ボランティア同士では、お互いの学び合いを通して、自然に横のつながりができている。三の丸会には学び合いの伝統がある。
- ・博物館との情報共有は、月1度の役員会やボランティア日誌等を通して行っている。

【ボランティアの募集】

- ・市政日より、博物館日より、博物館ホームページにて募集している。

(3) 受講者・参加者について**【活動のきっかけや動機】**

- ・ボランティア1
定年退職後、家族に進められ大学の学芸員集中講座を受講した。学習したことを生かすために、博物館のボランティアに参加した。
- ・ボランティア2
定年退職後、直に本物を見ることができると思ったので、博物館ボランティアに応募した。
- ・ボランティア3
長い間、家庭の主婦だったが、大学時代に学んだことを生かしたいとボランティアに参加するようになった。

【参加人数と活動の頻度】

- ・三の丸会のボランティアは120名程度。各曜日2つの班が活動しており、1つの班は10名程度。月2回程度の活動となる。

【どのような人が参加しているか】

- ・自分たちの班は、女性4名、男性6名という構成。定年退職がきっかけで始める人が多いが、仕事を持ちながら活動している人もいる。

【活動を継続するポイント】

- ・活動は月2回なので継続できる。(ボランティア3)
- ・ずっと続けたいという気持ちを持つ人が多い。(ボランティア1)
- ・見ているだけでは知識は増えないので、勉強会に参加して知識を深める。いろいろなことに参加することが長く続けることにつながる。人は皆知識を増やしたいという気持ちを持っている。(ボランティア2)

【活動によって学んだことや変化したこと】

- ・ボランティアが中心の生活に変わった。(ボランティア1)
- ・来館者に接しているうちに、知らない人に声をかけられるようになった。また、自

分で勉強するようになった。(ボランティア 2)

- ・生活は変わらないが、いろいろなことに広がりができ、忙しくなった。(ボランティア 3)

【班での交流】

- ・ボランティア同士で話をするのは主に昼の休憩時間。班員とは活動を通して親しくなっている。ただし、個人的なことについては本人が話さない限り触れないし、互いに個人的なことには立ち入ることはない。(ボランティア 3)

【展示説明に必要な知識の習得方法】

- ・採用時に2日間程度の研修を受ける。後は自助努力なので個人による。
- ・博物館ボランティア(三の丸会)は観光ボランティアガイドネットワークに所属しており、ボランティアのメンバーはネットワーク内の他のボランティア団体に所属している人も多い。例えば、瑞鳳殿ガイドの会などにも所属し仙台の歴史を幅広く学んでいる。(ボランティア 1)

【活動の楽しさ】

- ・様々な方々が来館するので、世界各国、日本全国の人とのふれあいができるところが楽しい。(全員)

【仙台に対する意識の変化】

- ・博物館で活動するようになってから、伊達政宗の偉大さや知恵を知り、もっと仙台について知りたいと思うようになった。(全員)

【行政への希望】

- ・文化財課との情報交換が密だとお互いの催しを知ることができてよい。(ボランティア 1)
- ・2回の研修で即、現場に出るので、班の中で学んでいく環境や新人のフォローがあるとよい。今は自分でマニュアルを作成して新人に配るなどしている。(ボランティア 2)
- ・研修がなかった昔よりはよいが、2回の研修では足りない。また、メンバーの新陳代謝が必要。新しいメンバーが入ることによって気付くことがある。(ボランティア 3)

【博物館ボランティア以外の活動状況】

- ・多くの人がボランティアのかけもちをしていてちょっとした業界感がある。(ボランティア 1)
- ・他のボランティアとかけもちをするようになった。(ボランティア 2)
- ・現在はやっていないが、以前、他のボランティアをしていた。(ボランティア 3)

2. 高齢者(関連)事業の課題

(1) 企画運営について

- ・ボランティアの運用の仕方については難しさもあるが、博物館を含めそれぞれの館

のやり方がある。例えば、新規の募集の仕方、任期、活動中の安全確保のため年齢制限を設けるか否かなど、これまで検討してきた課題もある。

(2) 受講者・参加者について

- ・例えば、班員同士が意見の相違からぎくしゃくしてしまうこともあるので、互いのコミュニケーションは大切である。全体としては、三の丸会という自治的な組織づくりができています。

3. 所感

- ・どの方も教養が高く、向上心を常にお持ちなのだと感じた。生活にも心にも余裕があるからこそ、できるのではないかと感じた。高齢者の生き方として非常に理想的な気がする。学習など二の次にせざるを得ない高齢者も多いので、そういう方々にも希望を持ってもらえる学習の場があればとも思った。
- ・人と関わることや、自分のやりたいことを見つけ継続していくことなどが、生き生きと生きる秘訣なのだと感じた。知識を増やしたい、そういった思いは誰にでもあつた！という言葉に、そうそう～と頷くところと、そうだろうか？と、疑問に思うところがあつた。個人差があり、ボランティアをされている方たちは、かなりハイレベル。
- ・取り組む姿や意欲には、わたしたちも見習うべきところがたくさんあり、特に今の子どもたちに自ら学ぶということを伝えていけたらいいなと感じた。(異世代間の交流)

調査日：平成 28 年 11 月 19 日（土）

施設名：折立市民センター

参加者：小形美樹委員、庄司弘美委員、高橋満委員長

対応者：折立市民センター 鈴木館長、小川さん、石塚さん
折立老壮大学運営委員長、運営委員 5 名

1. 折立市民センター高齢者関連事業

- ・平成 28 年度は 18 講座、101 コマあり。その中で折立老壮大学の他にも折立おやこ農園、ココカラ元気！折立健幸講座、折立風のメロディコンサート、折立ふれあいまつり、折立地域交流会、昔遊び伝承事業など比較的高齢者の参加の多い講座がある。
- ・元気な高齢者が多く、運営ボランティア等にも積極的に参加している。

【プログラムの企画等】

- ・プログラムは高齢者向けだけには考えていないが、参加は元気な高齢者が多い。
- ・ひとりで複数掛け持ちしている方も多く、ボランティアを引き受けている。（自ら参加、仕事する→ひっぱっていく）
- ・風のメロディコンサート（今年で 8 回目）は、ハーモニカ、大正琴、合唱などを聞きに高齢者が誘い合って参加する人気の講座。
- ・受講生のニーズ把握のため、講座のたびにアンケートを実施し、分析をしている。
- ・高齢者が参加する学習プログラムについては、具合が悪くなる方も稀にいるため、体調が悪くならないように気を配っている。（救急車等の対応）
- ・講座等受講後は、健康講座を継続実施したり、サークルとして引き続き活動する場合もある。サークル活動を行うようになった団体については、6 か月間会場使用料を減免するなどの優遇を行っている。

【高齢者学習への支援体制】

- ・センター窓口にはいろいろな相談があり、例えば囲碁をやりたいという人にはサークルを紹介するなど、その都度対処している。

【外部機関との連携の有無】

- ・町内会、幼稚園、小学校、中学校、施設等と、ふれあいまつりその他で連携している。

【広報や募集告知での工夫の有無】

- ・参加者の募集や活動内容の広報は、青葉区中央市民センターのホームページと Facebook に掲載はするが、市民センター全体のサイト上にあるので、地域に対する発信はチラシやセンターだよりが中心となる。また、サークル体験会、センターの廊下や階段への作品の展示も行っている。
- ・自主的な取組みを地域（学校・町内会・ボランティア団体・学びのサークル）とつなげる仕組みとして、年 2 回の地域懇談会があり、成果や計画について報告してい

る。この懇談会は地域の話を書くチャンスにもなっており、開催については町内会長などが協力してくれる。

2. 折立老壮大学

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・高齢者が心豊かに健康で生きがいのある生活を送るため学習の機会を提供する。
- ・講座を通じて受講生同士の親睦を深め、高齢者の孤立を防ぐとともに豊かな知識や経験を地域に生かしていくことを目指し、健康講話、歴史講座、館外学習などを実施。
- ・受講期間は5月～2月で年間10コマ。
- ・恒例の人気講座や地域講師を招くなど、年間10回様々な内容の講座を実施。
- ・60歳以上が対象で募集定員は60名。現在73名（男性30名、女性43名）が参加。
- ・参加人数は講座によりばらつきがあるが、毎回30～40名程が参加。

②企画運営について

- ・参加費無料。（講座によっては材料費、交通費がかかることがある）
- ・運営委員長等を選出し、自主運営が基本。
- ・運営委員は、何年間か参加を続けるうちに、自然に運営側にも参加するようになったという人が多い。
- ・運営委員は現在6名だが、人数は決まっていないので6～8人程度。
- ・講座内容の企画は2月に決定。ネタ切れにならないよう、いつも意識して市政だよりや新聞をチェックして切り抜き等をしており、それが継続の秘訣になっている。
- ・講師交渉は市民センター職員が行い、謝礼は市民センターで予算化している。
- ・館外学習、実技（手先を使うもの）、地元の講師等を入れ、毎回楽しく参加できるような工夫をしている。
- ・講座には運営委員は準備等があるため毎回参加しているが、会員の参加は自由で現在14名が皆勤。また、講座によっては会員以外の参加も認めている。
- ・様々な方が参加できるよう市民センターでは、楽しく来てもらえるような雰囲気づくりを心掛けたり、講座内容はバランスのとれた内容になるよう努めている。

③参加者・受講者について

- ・他の講座で参加した際に誘われたり、サークル活動の友達に誘われたり、市政だより、センターだよりを見て申し込んだなど、参加のきっかけはいろいろある。

【参加しての感想】

- ・いろいろな人と知り合いになれる。
- ・協力できる、人のためになっている。
- ・生活に張りができる。

- ・ゼロから始まるので楽しい。
- ・気楽に参加でき煩わしくない。
- ・拘束されないのがよい。

(2) 所感

- ・運営委員のみなさんはとてもお元気で生き生きと活動されていたが、運営を引き継いでいく方法などは自分が辞める時に誰かを見つけるという単純なもの。好きなところだけ参加できるという一般会員には全く縛りが無い。それでも、楽しく運営をやっていたらっしゃる方々の笑顔がとても素敵だった。
- ・今後は地域にある高校や社会学級等と一緒に活動できる機会ができれば、もっと活動の場が広がっていくのでは。
- ・好きなことを継続することが心身とも若々しくいられるコツだと思わされた。また、リタイアしたら以前のことは話さないという暗黙のルールで、メンバーが適度な距離感を持つことで活動がうまくいっているのだと感じた。所属する活動団体にもよると思うが、これからますますリタイア後の人生が長くなるので、このような人間関係の在り方は高齢者の学習において注目すべき点だと感じた。

調査日：平成 28 年 12 月 7 日（水）

施設名：太白図書館

参加者：小形美樹委員、庄司弘美委員、佐々木啓子委員

対応者：太白図書館 安保主査、星主任

読み聞かせボランティア「ののはな」会員 9 名

1. 太白図書館ボランティア事業

- ・太白図書館には読み聞かせボランティア、修理ボランティア、配架ボランティアと 3 つのボランティアがあり、いずれも参加者は比較的年配で近隣の方が多い。
- ・修理ボランティア及び配架ボランティアは太白図書館が主体で運営。
- ・毎週水曜日に図書館職員がおはなし会（幼児から小学校低学年向き読み聞かせ）を実施し、小学校の長期休みには拡大おはなし会などを行っている。
- ・泉図書館・太白図書館では読み聞かせボランティア養成講座（5 回コース）を年 1 回開催。またステップアップ講座なども開催している。倍率は 2 倍程度。
- ・太白図書館には八本松分室があり、開館日は水曜日・土曜日。読み聞かせボランティア「コスモス」が活動している。
- ・修理ボランティアは個人で登録し、活動日は毎週土曜日。5 人ほど（内、男性 1 人）が参加。
- ・配架ボランティアは個人で登録し、6 人ほど（内、男性 2 名）が参加。年配の方が多い。

2. 読み聞かせボランティア「ののはな」

(1) 高齢者（関連）事業の現状

①事業について

- ・平成 9 年に仙台市の読み聞かせボランティア養成講座の参加者の中から集まり、読み聞かせボランティアを立ち上げる。
- ・2 年の準備期間を経て平成 11 年の太白図書館のオープン時から活動を開始。
- ・活動場所は太白図書館、太白区中央児童館、太白区中田児童館。（定期的に行っているのは月 4 回ほど）、不定期で老人ホーム。

②企画運営について

- ・自主運営で活動している。
- ・太白図書館と協力して行っているのは、第 3 水曜日のおはなし会と長期休みに行う拡大おはなし会。

【活動頻度】

- ・1 年間の活動計画を基に、各会員から活動希望を出してもらい、スケジュールを調整している。少ない人は年間 5 回ほど、多い人は 15、6 回。

【活動内容の地域との関わりの有無】

- ・複数の団体へ登録している会員もいるため、会員個人のつながりで、他団体の活動に呼ばれたりすることはある。

【他の世代との交流など】

- ・読み聞かせの会では、幼児や親と関わりがある。また、中学生の職場体験や老人ホームなどでの活動では、他の世代への交流もある。

③受講者・参加者について

【会員構成】

- ・会員数は14名（全員女性）※発足当時は男性も数名いたが、現在はいない。
- ・参加歴2年に満たない人が1名、ほかは長く関わっている。
- ・体調を崩したり、引っ越したりして退会する人もいる。
- ・年齢構成は50代～70代。
- ・元々カルチャーセンターで朗読を学んでいた人や、学童保育の職員だった人、社会学級に参加していた人もいる。
- ・14名中、現在働いている人は2名。

【参加のきっかけ】

- ・読み聞かせボランティア養成講座や会員の口コミが多い。

【活動を継続するポイント】

- ・子どもに聞かせてあげるという視点ではなく、自分自身が読むことや子どもが好きだからやっているという自主性がある。
- ・継続することで出会える本があること、読み聞かせは1回1回その都度違うと感じており、いつまでも勉強していく好奇心があった。
- ・17年ほどの会の歴史と継続してきた人間としての積み重ねがあり、いろいろ教えてもらえることが嬉しいという活動歴の短い会員もいた。
- ・会員同士で、それぞれの家庭事情を配慮し、急きょ活動を交代するなどの臨機応変な対応がなされており、安心だという意見があった。人間関係のよさを感じられた。

【活動によって学んだこと】

- ・自分の居場所として、居心地のよさを感じている。
- ・児童館の子どもたちのよいところを発見できる、幸せを感じている。

(2) 高齢者（関連）事業の課題

①企画運営について

- ・他団体との意見交換の場があまりないと感じている。
- ・打ち合わせの手続きや会場代などが大変である。（以前は勉強会などもしていたし、定例会に欠席した人に議事録を送っていた）

②受講者・参加者について

- ・新規会員の開拓が難しい。

- ・会員の高齢化が進んでいる。
- ・ボランティアとして参加する人には本の選び方、読み聞かせの技術など基本的なことを知っていてほしいと感じており、全く学んでいない人の入会は難しい。また勉強会のような形はとらず、体験してもらいながら、自分で学んでいくのがよい。
- ・男性（夫）のボランティアに対する理解度が低いと感じている方がいた。

(3) 所感

- ・「ののはな」の17年という長い活動は、人と関わることや学ぶ楽しさの影響が大きい。そしてお互いの家庭事情へ配慮をしながら無理のない活動を行い、会員にとって活動自体が居場所となっていた。やりがいのある活動を通して、お互いに助け合うつながりが生まれていることは大きな成果だと感じた。読み聞かせという専門分野への学びの意識も高かった。
- ・読み聞かせをボランティアというよりプロの仕事として捉えている様子が見えられた。非常に意識の高い方々の集まりであると感じた。それゆえに、新人が入会するには少々敷居が高いような気がした。

Ⅱ 社会教育施設ボランティアに関するアンケート

○集計結果・分析

アンケートの概要

1. 対象者：科学館、歴史民俗資料館、富沢遺跡保存館、縄文の森広場、陸奥国分寺で活動する
ボランティア 266 人
2. 回収結果：有効回収数 144 件

I あなたご自身のことについてお聞きします。

問1 あなたの今年度末(平成29年3月31日)の年齢について、あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位:人(%) 以下同様)

- | | | | |
|------------|---------|------------|----------|
| 1. 20歳未満 | 1(0.7) | 6. 60歳～65歳 | 16(11.1) |
| 2. 20歳～29歳 | 0(0.0) | 7. 65歳～70歳 | 28(19.4) |
| 3. 30歳～39歳 | 1(0.7) | 8. 70歳～75歳 | 51(35.4) |
| 4. 40歳～49歳 | 6(4.2) | 9. 75歳以上 | 26(18.1) |
| 5. 50歳～59歳 | 13(9.0) | | |

「70～75歳」の35.4%を中心に、「75歳以上」の18.1%を加えるとおよそ半数を占める比率となる。これに「65～70歳」の19.4%を含めると7割を超え、社会教育施設のボランティアは、高齢者により支えられていると見てよい。

問2 あなたは女性ですか、男性ですか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。

1. 女性 48(33.3)
2. 男性 96(66.7)

「男性」が66.7%、「女性」が33.3%で、2対1の比率となっている。

Ⅱ 社会教育施設でのボランティア活動についてお聞きします。

問3 あなたがボランティア活動をはじめた年齢はおおよそ何歳ですか。

- | | | | |
|------------|----------|------------|--------|
| 1. ～49歳 | 23(16.0) | 6. 70歳～75歳 | 6(4.2) |
| 2. 50歳～54歳 | 11(7.6) | 7. 75歳～80歳 | 2(1.4) |
| 3. 55歳～60歳 | 21(14.6) | 8. 80歳以上 | 0(0.0) |
| 4. 60歳～65歳 | 56(38.9) | | |
| 5. 65歳～70歳 | 25(17.4) | | |

「60～65歳」で開始した人たちの比率は38.9%ともっとも多い。その前後の「55～60歳」が14.6%、「65～70歳」が17.4%と、ライフコースの移行期に社会参加を模索し、社会教育施設ボランティアへの参加と結びついていることが分かる。この移行期での働きかけが重要性をもつことがわかるだろう。

問4 ボランティアの継続年数は今年度末（平成29年3月31日）で何年になりますか。

1. 3年未満 28(19.4)
2. 3年以上5年未満 26(18.1)
3. 5年以上10年未満 39(27.1)
4. 10年以上 51(35.4)

「10年以上」が35.4%でもっとも多く、「5～10年」の27.1%を加えると、およそ6割が比較的長期にボランティア活動を行っていることがわかる。つまり、ボランティア活動を継続させる要素があることを予想させる。

問5 あなたはどのくらいの頻度で、ボランティア(これに関連する活動)に参加していますか。

1. ほぼ毎週 39(27.1)
2. 月に2～3回 76(52.8)
3. 月に1回程度 15(10.4)
4. 年に数回 10(6.9)
5. 年に1回 1(0.7)
6. その他（具体的にお書きください） 4(2.8)

ボランティア活動への参加頻度は、「ほぼ毎週」という者が27.1%、「月に2～3回」が52.8%と、比較的高い頻度でボランティア活動を継続していることがわかる。

問6-1 あなたがボランティアをはじめた動機は何ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1. 他人や社会のために役に立ちたい 83(57.6) | 7. 活動に興味がある 72(50.0) |
| 2. 自分の技能や能力、経験を活かす 57(39.6) | 8. 学校教育の影響を受けた 5(3.5) |
| 3. 自分の生きがいを発見したい 58(40.3) | 9. 職場の影響を受けた 3(2.1) |
| 4. 余暇を有効に過ごしたい 79(54.9) | 10. 友人の影響を受けた 6(4.2) |
| 5. 友人を得たい 21(14.6) | 11. 趣味を活かしたい 29(20.1) |
| 6. 自分の身に着く知識や技能を修得 58(40.3) | 12. その他 5(3.5) |

ボランティア活動へ参加した動機で5割を超えているのは「他人や社会のために役に立ちたい」(社会貢献志向)の57.6%、「余暇を有効に過ごしたい」(有効活用)が54.9%、「活動に興味がある」(活動志向)が50.0%と続いている。

問6-2 問6-1で8、9、10、11につけた方は、○をつけた番号を記載し、どのような影響を受けたか具体的にお書きください。

問7 あなたはボランティア活動で問題や悩みを感じることがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- | | | | |
|--------------|----------|----------------|----------|
| 1. 家族の理解不足 | 3(2.1) | 7. 体力的な負担 | 20(13.9) |
| 2. メンバーの人間関係 | 17(11.8) | 8. 活動のマンネリ化 | 41(28.5) |
| 3. 時間的な負担 | 25(17.4) | 9. 職員との意見の食い違い | 7(4.9) |
| 4. 活動の進め方 | 27(18.8) | 10. その他（具体的に） | 6(4.2) |
| 5. 経済的な負担 | 20(13.9) | | |
| 6. メンバーの高齢化 | 32(22.2) | | |

ボランティア活動で感じている問題や悩みは「活動のマンネリ化」が28.5%、「メンバーの高齢化」が22.2%で課題として認識されている。高齢化は、活動そのものの活性化や継承に問題を投げかけている。また、活動そのものの問題についても、「活動の進め方」が18.8%、「メンバーの人間関係」が11.8%と高い数値となっている。条件という面では、「時間的な負担」が17.4%、「経済的な負担」が13.9%である。

問8 あなたがボランティア活動で感じる良い点はどのようなことですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- | | | | |
|----------------|----------|----------------|----------|
| 1. 新しい友人ができた | 36(25.0) | 5. 生きがいを感じる | 51(35.4) |
| 2. 知識や技能が身に着いた | 82(56.9) | 6. 人間性が豊かになった | 39(27.1) |
| 3. 博物館等の理解 | 90(62.5) | 7. 余暇を有効に活用できる | 70(48.6) |
| 4. 利用者から感謝される | 58(40.3) | 8. その他（具体的に） | 8(5.6) |

問7のような課題を抱えながらも、活動の継続を支えるもの、それが「良い点」である。まず、「博物館等の理解」が62.5%、「知識や技術が身についた」が56.9%というような専門性志向が見られることが特徴である。「余暇を有効に活用できる」48.6%だけでなく、「利用者から感謝される」40.3%、「生きがいを感じる」35.4%というような承認が得られることも大切な要素である。

問9 あなたはボランティア活動を今後も続けたいと思いますか。

- | | |
|---------------|-----------|
| 1. できる限り続けたい | 110(76.4) |
| 2. 余裕があれば続けたい | 26(18.1) |
| 3. できれば身をひきたい | 4(2.8) |
| 4. 無回答 | 6(4.2) |

ボランティア活動への参加を高く評価していることにより、今後の継続意志も「できる限り続けたい」が76.4%を占めている。

問 10 あなたはボランティアにどの程度満足していますか。

- | | |
|-------------|----------|
| 1. 満足 | 36(25.0) |
| 2. ある程度満足 | 96(66.7) |
| 3. 満足とは言えない | 6(4.2) |

「満足」が 25.0%、「ある程度満足」が 66.7%を占め、およそ 9 割が満足していることがわかる。

問 11 ボランティアに対する支援体制について期待することはありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|-----------------------|----------|
| 1. 経済的支援 | 48(33.3) |
| 2. 学習支援（研修会の充実等） | 67(46.5) |
| 3. ボランティア同士の交流機会の提供 | 39(27.1) |
| 4. 活動施設の運営への意見の反映 | 32(22.2) |
| 5. 活動に対する評価 | 18(12.5) |
| 6. ボランティアの自主的活動の機会の提供 | 29(20.1) |
| 7. その他 | 2(1.4) |

ボランティア活動を継続する上で、期待する支援としては、まず、「学習支援」が 46.5%でもっとも高い数値である。さらに、「経済的支援」の 33.3%が続く。特徴的なのは、「ボランティア同士の交流機会の提供」の 27.1%、「ボランティアの自主的活動の機会の提供」の 20.1%など、自主的活動への希望が多いことだろう。

Ⅲ 最後に社会教育施設ボランティア活動以外の活動についてお聞きします。

問 12-1 あなたは現在、社会教育施設ボランティア以外の団体活動に参加していますか。あてはまるものすべてに○をつけ、お差し支えなければ、右欄に具体的にお書きください。

- | | |
|---------------------|----------|
| 1. 趣味のサークル・団体 | 41(28.5) |
| 2. 健康・スポーツのサークル・団体 | 25(17.4) |
| 3. 町内会・自治会 | 31(21.5) |
| 4. ボランティア団体（社会奉仕団体） | 21(14.6) |
| 5. 学習・教養のサークル・団体 | 14(9.7) |
| 6. 老人クラブ | 11(7.6) |
| 7. 退職者の組織（OB会など） | 17(11.8) |
| 8. シルバー人材センター等の生産組織 | 6(4.2) |
| 9. 市民活動団体（NPO等） | 10(6.9) |
| 10. 女性団体 | 2(1.4) |
| 11. 宗教団体（講などを含む） | 3(2.1) |
| 12. 商工団体 | 2(1.4) |
| 13. その他 | 11(7.6) |

一般に、参加の累積効果があるといわれている。つまり、ある活動へ参加している人たちは、他のさまざまな活動にも参加する傾向が見られるが、社会教育施設ボランティアへ参加する人たちは「趣味のサークル・団体」(28.5%)や「健康・スポーツのサークル・団体」(17.4%)にも参加する傾向が見られる。このほか、「町内会・自治会」に21.5%、「ボランティア団体」にも14.6%が参加している。「退職者の組織」に11.8%が参加していることは、高齢期の経済的条件に関係していることが考えられる。

問12-2 問12-1で○をつけた方は、社会教育施設ボランティアと社会教育施設ボランティア以外の団体活動をあわせてどのくらいの頻度で活動を行っていますか。

1. ほぼ毎週	40(27.8)
2. 月に2~3回	34(23.6)
3. 月に1回程度	13(9.0)
4. 年に数回	4(2.8)
5. 年に1回	2(1.4)
6. その他	2(1.4)

ボランティア活動以外の活動頻度は、「ほぼ毎週」という者が27.8%、「月に2~3回」が23.6%と、ボランティア活動ほどではないにしても、かなりの頻度で活動に参加していることがわかる。社会教育施設ボランティアへの参加頻度とあわせて考えると、対象者の人たちはかなり忙しく社会参加しているとみてよいだろう。

IV 社会教育施設ボランティアについて、あなたのご意見やご感想を自由にお聞かせください。

Ⅲ 参考資料

○仙台市社会教育委員名簿

(任期:平成 27 年 11 月 1 日から平成 29 年 10 月 31 日まで)

氏 名	所属等	役職等
阿部 清人	株式会社MCラボ 代表取締役	
小形 美樹	仙台青葉学院短期大学教授	
男澤 亨	株式会社あるく代表取締役社長	
菅野 仁	宮城教育大学副学長(学務担当)・教育学部教授	H28.9 退任
菊地 崇良	仙台市議会議員	
佐々木 啓子	西公園プレーパークの会プレーリーダー	
佐藤 亜矢子	仙台市民生委員児童委員協議会主任児童委員 部会長	
佐藤 美佳子	仙台市PTA協議会顧問	
庄司 弘美	仙台市社会学級研究会会長	
高橋 満	東北大学大学院教授	委員長
近澤 裕子	仙台市立西多賀小学校校長	
渡辺 祥子	フリーアナウンサー・朗読家	
渡邊 千恵子	尚綱学院大学教授	副委員長

敬称略・五十音順

所属等は委員在任時最終のもの

○ 仙台市社会教育委員の会議 審議の経過

	開催日	協議内容
第1回	平成27年11月17日	○ 委員長、副委員長の選出について ○ 会議の運営について ○ 会議の日程について
第2回	平成28年 2月 2日	○ 今期会議のテーマについて
第3回	平成28年 4月12日	○ 平成28年度社会教育関係予算について ○ 平成28年度社会教育団体に対する補助金について ○ 今期会議のテーマについて
第4回	平成28年 6月 7日	○ ライフサイクルにおける高齢期の課題について ○ 今期会議のテーマについて ○ 今後の進め方について
第5回	平成28年 8月 9日	○ 調査方法の検討
事例調査	平成28年9月～12月	事例調査 ○ シルバーセンター部会 平成28年 9月30日 シルバーセンター 平成28年11月 8日 生涯学習支援センター 平成28年12月 7日 東中田市民センター ○ 学校支援地域本部部会 平成28年 9月 6日 加茂中学校区学校支援地域本部 平成28年10月12日 沖野市民センター 平成28年12月 5日 袋原小学校学校支援地域本部 ○ 社会教育施設部会 平成28年 9月 4日 博物館 平成28年11月19日 折立市民センター 平成28年12月 7日 太白図書館
第6回	平成28年10月18日	○ 各部会からの調査状況報告
第7回	平成28年12月20日	○ 各部会からの調査結果報告
第8回	平成29年 2月14日	○ 提言の骨子協議
第9回	平成29年 4月 11日	○ 平成29年度社会教育関係予算について ○ 平成29年度社会教育団体に対する補助金について ○ 提言の骨子確定 ○ 提言書素案の協議
第10回	平成29年 6月 6日	○ 提言書素案の協議
第11回	平成29年 8月 8日	○ 提言書最終案の協議
第12回	平成29年10月17日	○ 提言書最終協議

発 行

仙台市教育委員会生涯学習課

〒980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目5番12号

上杉分庁舎10階

TEL 022-214-8886 FAX 022-268-4822

本文用紙は古紙再生紙を使用しています。